

福岡大学

スポーツ科学部

大学院スポーツ健康科学研究科

年報

平成30年度（2018）

The logo consists of the letters 'F.U.' in a large, white, serif font, centered on a dark blue rectangular background. The background is framed by a thick green border.

Sports and Health Science

福岡大学スポーツ科学部

第4号

福岡大学

スポーツ科学部

大学院スポーツ健康科学研究科

年報

平成30年度（2018）

福岡大学スポーツ科学部

第4号

目次

挨拶	1
活動内容	
1 学部および研究科の人材養成の目的と三つのポリシー	
(1) スポーツ科学部	3
(2) スポーツ健康科学研究科	7
2 2018年度 活動年譜	9
3 教員組織および担当者	11
4 入試状況、学生数および卒業生数、出張講義	
(1) スポーツ科学部	14
(2) スポーツ健康科学研究科	17
5 教育活動	
(1) 入学前教育	18
(2) 新入生懇談会	18
(3) クラス面談・修学指導	20
(4) フレッシュマンセミナー授業方法	21
(5) ステップアップセミナー授業方法	24
6 研究活動	
(1) スポーツ科学部	26
(2) スポーツ健康科学研究科	26
7 学部 FD・SD 活動	
(1) シラバス点検	28
(2) 学外研修参加	28
(3) ワークショップ、研修会の開催	29
(4) 授業アンケート	30
8 地域連携、社会貢献、高大連携	36
9 国際交流	39
10 教職課程	41
11 就職・進路	
(1) スポーツ科学部	43
(2) スポーツ健康科学研究科	44
12 広報推進	45
13 外部獲得資金実績	47
14 関連資料一覧	49

学部・研究科の平成最後の魅力発信

スポーツ学部長 田中 守

スポーツ健康科学研究科長 檜垣 靖樹

スポーツ科学部とスポーツ健康科学研究科では、2015年度版から学部と研究科の年間活動を総括し、記録に残すとともに学内外にその成果を公表する目的で、2016年秋に「スポーツ科学部・スポーツ健康科学研究科年報」を創刊しました。今回は、2018年度版（第4号）になります。学部・研究科教員の研究活動（研究業績）と社会活動、競技・指導活動は「スポーツ科学研究（大学研究紀要）」に、また現在学部として取り組んでいる教育プログラムの「体育・スポーツのエキスパート育成プログラム」と「ココロとカラダのウエルネスプログラム」は別冊あるいはスポーツ科学部ホームページ上の電子ファイルとして詳細を掲載していますので、本年報（第4号）はこれら以外の内容になります。具体的には、目次をご覧ください。

スポーツ科学部は、1969年（昭和44年）体育学部体育学科として学生定員100名で創設されました。その後、学生定員増（臨時定員増を含め）を何度か経て現在の学生定員295名となっています。1998年（平成10年）スポーツ科学部への名称変更とともにスポーツ科学科と健康運動科学科の2学科へ改組転換し現在に至っています。2019年（平成31年）3月295名の卒業生を加えて総数11,376名を輩出しています。

スポーツ健康科学研究科は、1990年（平成2年）体育学研究科体育学専攻修士課程として6専修部門（体育学、体力学、スポーツ医学、体育科教育学、コーチ学、運動健康学）を創設しました。2003年（平成15年）にスポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻に改称し、現在6部門13専修となっています。また、2004年（平成16年）にはスポーツ健康科学専攻博士課程を2部門（健康運動科学、スポーツトレーニング科学）増設しました。2019年（平成31年）3月9名の修了生を加えて総数431名の修了生（修士課程394名、満期退学者を含む博士課程37名）、18名（2018年度は1名）の課程博士と2名の論文博士を輩出しています。

2013年（平成25年）12月から学部役職員の變更に伴う新体制がスタートし、“**学部の魅力づくり**”をテーマに、“**FUSS アクティブプラン（福岡大学スポーツ科学部推進計画）**”の名称で取り組んでいます。スポーツ・健康運動に関する分野において社会を先導する高い専門性と気概を持った人材の育成（教育面）に加えて、これを実現できる教育環境づくり（教育組織、FD・SD）、並びに教育や社会に資する研究環境の整備（研究面）を推進し、さらに近未来に向かって学部が独自に取り組む特別プロジェクトを推進し、もって“**学部の魅力づくり**”を目標としています。

2018年度（平成30年度）の取り組みとして、スポーツ科学部から提案した「株式会社ミズノとの全学的連携・協力協定の締結」によりスポーツ科学科開講科目の「ピークパフォーマンス演習」での講師招聘、研究関係では布目寛幸教授とのシューズ開発、運動部関係ではミズノの指定管理が決まった福岡市総合体育館のオープン記念イベント協力やサッカーの障がい者スポーツへ

の協賛などが実施されました。施設面では、卓球場の総合体育館移設に伴い、改築により 1211 講義室とゼミ室 3 室・大学院講義室 1 室・スポーツ栄養学実験室が完成し、2018 年 4 月より使用しています。その他、大学からの支援を受けて実施している「体育・スポーツのエキスパート育成プログラム」や「ココロとカラダのウェルネスプログラム」、教員現役合格率・健康運動指導士合格率アッププロジェクトや国際スポーツ人材育成派遣プロジェクトなど、継続的な教育活動、地域・社会貢献活動、国際交流活動、高大連携活動、就職・進路支援活動等を行っています。大学院スポーツ健康科学研究科では、釜山大学との大学院国際学术交流も 2018 年度で 7 回目になりました。また、これらの魅力を学内外に精力的に発信すべく、学部ホームページをリニューアルし、2018 年 4 月より稼働しています。

一方、人事に関して、「スポーツ生理学」「運動療法・運動処方」がご専門の道下竜馬准教授（本学体育学部卒業生）が、また新たな分野として「スポーツ経営管理学」「スポーツ産業論」がご専門の霜島広樹講師（早稲田大学出身）が昨年 4 月採用されました。昇格助教 2 名、新助教 2 名、新助手 7 名、新教育技術職員 1 名を含めて、専任教員（講師以上）31 名、特任教授 1 名、助教・助手 26 名、教育技術職員 4 名・事務職員 7 名の総勢 69 名で学生教育に取り組んでいます。さらに、スポーツ科学部からの提案として、次年度から総合体育館内トレーナールームに嘱託職員（トレーナー）の配置が決定されています。

平成最後の 3 月に、福岡大学として UNIVAS（日本版 NCAA）への参加表明を行いました。このことは、学校法人福岡大学としての「スポーツ強化センター」（仮称）設立に向けた組織づくりに進むことも視野に、スポーツ科学部がその中核を担うものと期待しています。

本学では、1996 年（平成 8 年）から大学基準協会の「大学評価マニュアル」に基づき、自己点検・評価を開始しました。その後、自己点検・評価の実施と結果公表の義務化に伴い 2000 年度（平成 12 年度）に第 2 回目の自己点検・評価を行いました。2004 年（平成 16 年）からは第三者機関（認証評価機関）による認証評価を 7 年に 1 回受けることが義務付けられ、本学では 2007 年度（平成 19 年度）に第 3 回目、2014 年度（平成 26 年度）に第 4 回目の自己点検・評価を行い、翌年“大学基準協会に適合”との認証評価を受けました。2015 年度（平成 27 年度）からは毎年自己点検・評価を行うことになり、本年報が学部基礎データ調書資料としても活用できています。

1 学部および研究科の人材養成の目的と三つのポリシー

(1) スポーツ科学部

●人材養成の目的

スポーツ科学部は、スポーツ・運動に関する人文科学、社会科学、自然科学及び各分野を融合した総合科学的研究を深め、それによって得られた知識を実践に生かすことを教育研究の理念とする。この理念に基づき、スポーツ界、教育界、産業界、官界、地域社会、医療分野等において、貢献し得る優秀な人材を養成することを目的とする。

○アドミッション・ポリシー

スポーツ科学部は人材養成の目的を達成するために、

1. スポーツを日常的に実践している人
2. スポーツや身体運動を対象に積極的に科学しようとする人
3. 競技スポーツにおけるパフォーマンスの向上を目指す人
4. 体育教員、スポーツコーチ、インストラクター、健康運動指導士などスポーツや健康全般にかかわる職種を目指そうとする人

の入学を求めています。

○カリキュラム・ポリシー

スポーツ科学部のカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしています。また、1年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む推奨コースを設定しています。さらに、実技科目や演習科目は、理論と実践を統合した教育を体系的に行うために、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。

スポーツ科学科は、自らが専門とするスポーツ種目の技能およびスポーツ全般にわたる科学的指導能力の向上を、また健康運動科学科は、健康運動・レクリエーションの科学的基礎知識に基づく実践・指導能力の習得をそれぞれねらいとし、各学科の特性にあったカリキュラムを編成しています。

○ディプロマ・ポリシー

スポーツ科学部の教育課程においては、以下に掲げる能力を備え、厳格な成績評価のもとで所定の単位を修得した学生に卒業を認定し、学位を授与します。スポーツ科学部の教育課程においては、以下に掲げる能力を備え、厳格な成績評価のもとで所定の単位を修得した学生に卒業を認定し、学位を授与します。

1. スポーツや運動全般の科学的指導能力を備えている。
2. 専門とするスポーツ・運動の高い技能と指導能力を備えている。
3. スポーツ・運動の医科学的知識に基づく卒業論文作成能力を備えている。
4. スポーツ・運動を通じて得られた社会や職業活動に必要なコミュニケーション能力、課題解決力、倫理的思考力を備えている。

5. 人文科学、社会科学、自然科学および外国語の幅広い知識と教養を身につけている。

■ スポーツ科学科 学位（教育）プログラム名：スポーツ科学

●人材養成の目的

スポーツ科学科は、スポーツ競技力や運動能力の向上を目指したスポーツ医科学分野の知識を有し、スポーツ界、教育界、産業界、官界等において、スポーツ医科学の知識に基づいた適切なスポーツの実践と論理的指導ができる人材を中心に、科学的トレーニング法のみならず、施設や用具等の開発、スポーツイベント等の企画・運営を含めたスポーツマネジメント等ができる人材も養成することを目的とする。

スポーツ科学科 三つのポリシー

○アドミッション・ポリシー

◆養成する人材像・教育課程の特色

スポーツ科学科は、競技力や運動能力の向上を目指したスポーツ医科学分野の知識を有し、適切なスポーツの実践と論理的指導ができる人材を養成することを目的としています。そのために、スポーツ・運動に関する理論と実践を統合した教育科目を体系的に配し、学生の興味・関心及び卒業後の進路に対応した4つのコースを用意しています。自身の競技力向上とアスリートやコーチを目指すためのアスリート・コーチコース、アスリートのサポートを担うためのトレーナーコース、現役で中学校・高等学校の保健体育教員採用試験合格を目指すための保健体育教員コース、地域社会における幅広いスポーツ指導者として活躍するための生涯スポーツ教育コースがあり、多様な社会ニーズに対応したスポーツ科学の在り方を探求しています。

◆求める人材像（求める能力）

- + 知識・理解 競技スポーツを科学的に捉えるための基礎学力を有している人
- + 技能 競技スポーツの経験を有し、競技力向上のために科学的に課題を分析できる人
- + 態度・志向性 スポーツの場面以外でも、スポーツの精神を体現化し、スポーツの素晴らしさを伝えたいと考える人
- + その他能力・資質 学校生活全般でリーダーシップ・コミュニケーション能力を発揮した人や英語資格の取得等に努めた人

◆入学者選抜のねらい

スポーツ科学科では、競技スポーツの実践経験と高等学校までの学びを融合させ、競技力向上を目的とするスポーツ科学の発展に寄与しようとする人材を広く受け入れます。そのため、これまでに培われた学力、活動や経験を通じて身につけた能力、資質、学ぶ意欲などを、多面的・総合的に評価する多様な入学試験を実施します。

○カリキュラム・ポリシー

本学位（教育）プログラムのカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した「知識・理解」「技能」「態度・志向性」を備えた人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって、学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしていま

す。また、1年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む4つの推奨コース（アスリート・コーチコース、トレーナーコース、保健体育教員コース、生涯スポーツ教育コース）を設定しています。カリキュラムの中に各コースの推奨科目群およびコース共通科目群を設け、早くから専門的知識や技能を体系的に習得できるようにしています。

スポーツ・運動の理論と実践を統合した教育を体系的に行うため、「スポーツ科学演習」「卒業研究論文」などの演習科目は、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。実技科目については、自らが専門とするスポーツ種目を学ぶように、選択必修の実技科目を多く配置しています。そして、「スポーツ実習Ⅱ」や「コーチ法演習」などの科目では、専門とするスポーツ種目のコーチング理論を深めるとともに、リーダーシップ・コミュニケーション能力および倫理的思考力の育成も行っています。

○ディプロマ・ポリシー

【知識・理解】

- A-1 スポーツ・運動の医科学的基礎知識について理解し、説明できる。
- A-2 専門とするスポーツの技術構造について理解し、説明できる。
- A-3 専門とするスポーツの指導方法について理解し、説明できる。
- A-4 人文科学、社会科学、自然科学および外国語の幅広い知識と教養を理解している。

【技能】

- B-1 専門とするスポーツの技術を習得し、競技等の場面において発揮することができる。
- B-2 専門とするスポーツの技術構造や指導方法に関する知識や理論に基づいて指導することができる。
- B-3 スポーツ・運動を通じてリーダーシップ・コミュニケーション能力を身につけ、発揮することができる。
- B-4 スポーツ・運動を通じて倫理的思考力を身につけ、発揮することができる。

【態度・志向性】

- C-1 スポーツ科学の発展に貢献しようとする意欲を持っている。
- C-2 スポーツ・運動について自ら課題を発見し、解決する意欲を持っている。
- C-3 スポーツ・運動を論理的に説明する意欲を持っている。
- C-4 スポーツ・運動を通じて地域社会に貢献する姿勢を備えている。
- C-5 スポーツ・運動についてマネジメント等に取り組む意欲を持っている

■ 健康運動科学科 学位（教育）プログラム名：健康運動科学

●人材養成の目的

健康運動科学科は、健康運動やレクリエーション活動による心身の健康の回復、保持、増進を目指した医科学分野の知識を有し、地域社会、教育界、産業界、医療分野等において、創造的・実践的な指導を行うことができる人材を中心に、企業や地域及び医療とも連携した健康づくりマネジメント等ができる人材も養成することを目的とする。

健康運動科学科三つのポリシー

○アドミッション・ポリシー

◆養成する人材像・教育課程の特色

健康運動科学科は、心身の健康の回復や保持増進を目指した医科学分野の知識を有し、創造的・実践的な指導ができる人材を養成することを目的としています。そのために、健康運動・レクリエーションに関する理論と実践を統合した教育科目を体系的に配し、学生の興味・関心及び卒業後の進路に対応した3つのコースを用意しています。健康運動関連資格取得を目指す健康運動指導者コース、現役で中学校・高等学校の保健体育教員採用試験合格を目指すための保健体育教員コース、地域社会における幅広いスポーツ指導者として活躍するための生涯スポーツ教育コースがあり、多様な社会ニーズに対応した健康運動科学の在り方を探求しています。

◆求める人材像（求める能力）

- + 知識・理解 生涯スポーツを科学的に捉えるための基礎学力を有している人
- + 技能 生涯スポーツの経験を有し、健康の回復や保持増進について科学的に分析できる人
- + 態度・志向性 スポーツの場面以外でも、スポーツの精神を体現化し、スポーツの素晴らしさを伝えたいと考える人
- + その他能力・資質 学校生活全般でリーダーシップ・コミュニケーション能力を発揮した人や英語資格の取得等に努めた人

◆入学者選抜のねらい

本学位（教育）プログラムのカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した「知識・理解」「技能」「態度・志向性」を備えた人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしています。また、1年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む3つの推奨コース（健康運動指導者コース、保健体育教員コース、生涯スポーツ教育コース）を設定しています。カリキュラムの中に各コースの推奨科目群とコース共通科目群を設け、早くから専門的知識や技能を体系的に習得できるようにしています。

健康運動・レクリエーションの理論と実践を統合した教育を行うために、「スポーツ科学演習」「卒業研究論文」などの演習科目は、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。また、健康運動・レクリエーションに関わる実習科目や演習科目では、現場の実践に即した科学的指導能力やマネジメント能力を高め、地域社会に貢献する態度を身につけられるようにしています。

○カリキュラム・ポリシー

本学位（教育）プログラムのカリキュラムは、ディプロマ・ポリシー（DP）に示した「知識・理解」「技能」「態度・志向性」を備えた人材を育成することを目的として編成されています。

そのためのカリキュラムとして、1年次より共通教育科目とともに基礎的な専門教育科目を配置し、学年が進むにしたがって学生個々の興味と関心に基づいて選択できる専門教育科目を多くしています。また、1年次から就職等の進路を視野に入れて意図的、計画的に専門教育を進めることができるように、一部選抜制を含む3つの推奨コース（健康運動指導者コース、保健体育教員コース、生涯スポーツ教育コース）を設定しています。カリキュラムの中に各コースの推奨科目群とコース共通科目群を設け、早くから専門的知識や技能を体系的に習得できるようにしています。

健康運動・レクリエーションの理論と実践を統合した教育を行うために、「スポーツ科学演習」「卒業

研究論文」などの演習科目は、少人数のクラスによる双方向の授業形態を多くとっています。また、健康運動・レクリエーションに関わる実習科目や演習科目では、現場の実践に即した科学的指導能力やマネジメント能力を高め、地域社会に貢献する態度を身につけられるようにしています。

○ディプロマ・ポリシー

【知識・理解】

- A-1 健康運動・レクリエーションの医科学的基礎知識について理解し、説明できる。
- A-2 健康運動・レクリエーションの技術について理解し、説明できる。
- A-3 健康運動・レクリエーションの指導方法について理解し、説明できる。
- A-4 人文科学、社会科学、自然科学および外国語の幅広い知識と教養を理解している。

【技能】

- B-1 健康運動・レクリエーションの技術を習得し、運動指導等の場面において発揮することができる。
- B-2 健康運動・レクリエーションの技術や指導方法に関する知識や理論に基づいて指導することができる。
- B-3 健康運動・レクリエーションを通じてリーダーシップ・コミュニケーション能力を身につけ、発揮することができる。
- B-4 健康運動・レクリエーションを通じて倫理的思考力を身につけ、発揮することができる。

【態度・志向性】

- C-1 健康運動科学の発展に貢献しようとする意欲を持っている。
- C-2 健康運動・レクリエーションについて、自ら課題を発見し、解決する意欲を持っている。
- C-3 健康運動・レクリエーションを論理的に説明する意欲を持っている。
- C-4 健康運動・レクリエーションの技術を通じて地域社会に貢献する姿勢を備えている。
- C-5 健康運動・レクリエーションについてマネジメント等に取り組む意欲を持っている。

(2) スポーツ健康科学研究科

●人材養成目的及びその他教育研究上の目的

スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻は、運動、スポーツ、レクリエーション、レジャー、体育、健康、福祉等を対象とする学問の深化を図り、健康長寿社会の実現に向けて貢献し、高度なスポーツ知を拓く研究科として機能することを教育理念とする。博士課程前期では、競技スポーツ・学校体育・地域スポーツ・医療等の指導現場において高度な知識と技術を基に、体育・スポーツ・健康・レクリエーションに関する科学的指導を実践・応用できる専門家の養成を行う。博士課程後期では、健康増進や疾病・障害の治療・予防・再発防止を目的とした運動プログラムの開発・実践に関する研究や、幼少期から高齢期に至るライフステージに応じたスポーツパフォーマンスの向上を目的とした研究などの専門的な領域について自立して研究活動を行い得る研究者を養成する。

スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻三つのポリシー

○アドミッション・ポリシー

本研究科は、博士課程前期では、指導現場において科学的指導を実践・応用できる人材を育成するという観点から、

- 1) スポーツや運動を科学的観点から研究することに興味のある人
- 2) 競技スポーツにおいてパフォーマンスを向上させる科学的方法に興味のある人
- 3) 教育の現場でより高度な科学的成果を取り入れようとしている人
- 4) 医療現場で運動により健康の維持や疾病の予防しようとする人

の入学を求めている。また、博士課程後期では、高等教育機関あるいは研究機関において独立して研究できる人材を育成するという観点から、

- 1) 基礎的な学力を有し、創造的で柔軟な発想を持ち、研究を遂行することができる人
- 2) 博士課程前期では十分な研究成果を得られず、研究を継続することを望む人
- 3) 医療や健康増進に強い熱意がある人
- 4) 広く自分の研究成果を国外にも発信したい人
- 5) スポーツ・体育分野の出身者以外にもスポーツや健康を科学的に研究することに興味のある人の入学を求めている。

そのため、体育、体育・スポーツ科学関連学部の卒業生のみならず、広範囲からの領域の学生の受け入れを目指している。特に、社会人や外国人は積極的に受け入れる。

○カリキュラム・ポリシー

博士課程前期では、各自の専門性を高めるために、各部門ごとに「特別研究」と「特講」などの専修科目を設置し、同時に、関連する領域の知識の獲得を意図した非専修科目が配置している。特に、スポーツ医学部門では講義科目と対応した実習科目が用意されている。さらに、論文指導教員全員によるオムニバス形式の科目は部門の枠を越えて幅広い知識の獲得を目指している。

博士課程後期では、博士論文指導を目的とした「特別研究」以外にも、全論文指導教員および論文指導補助教員によるオムニバス形式の科目を配置し、基本的なリサーチメソッドの獲得に資している。

○ディプロマ・ポリシー

博士課程前期では、修士論文の完成度を高めるために中間報告会での発表と、外部からの評価を受けるために関連学会での発表を義務づけている。博士課程後期では、最終論文提出の半年前に中間報告に相当する研究計画書の提出・審査を義務づけている。また、博士論文の外部からの評価を受けるために国際誌あるいは全国誌への掲載を義務づけている。

これらの修了要件により、博士課程前期では指導現場において科学的指導を実践・応用できる専門家としての進路選択に資することができ、博士課程後期では高等教育機関あるいは研究機関において自立して研究活動を行える研究者を養成する。

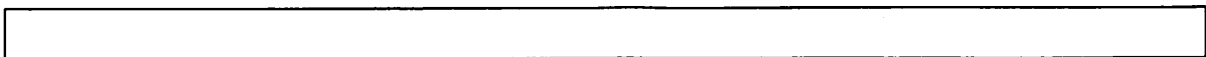
2 2018年度 活動年譜

2018年		【学部】	【研究科】
4月	1日	入学式	入学式・新入生ガイダンス
	2日	新入生ガイダンス	
	4日	新入生懇談会	
		ステップアッププログラム	
	10日	先輩と語る -大学と社会- 前期授業開始	
5～6月		修学指導	
6～7月		父母懇談会 (本学・各地)	
7月	7日		大学院推薦入試
	10～24日	前期授業アンケート	
	24日	前期授業終了	前期授業終了
	25日	前期定期試験開始	
	30日		修論中間報告会
8月	3日	前期試験終了	
	4日	夏季休業開始	夏季休業開始
	4日	オープンキャンパス	オープンキャンパス
	6日	前期集中授業開始	
	4～7日	プール実習	
	7～8・10日	ゴルフ実習	
	10日	前期集中授業終了	
	8日	AO入試特別講座①	
	9日	AO入試公開練習会①	
	18～22日	キャンプ実習 (前段)	
	23日	AO入試公開練習会②	
	24日	AO入試特別講座②	
	27～31日	キャンプ実習 (キャンプⅡ)	
	9月	3日	
10～13日		海浜実習	
7～11日		キャンプ実習 (後段)	
13日		夏季休業終了	
14日		後期授業開始	後期授業開始
29日		前期卒業式	学位記授与式 (修士)

10月	4日		学位記授与式(博士)
11月	20・21日 24日	A方式推薦入試	釜山大学との学術交流会
12月	8日 18~1月16日 27日	ステップアッププログラム 先輩と語る -大学と社会- 学部祭 後期授業アンケート 冬季休業開始	冬季休業開始

2019年		【学部】	【研究科】
1月	4日 5日 16日 17日 18日 19・20日 28日 30日 31~2月2・4・5日	冬季休業終了 後期授業再開 後期授業終了 後期試験開始 FDワークショップ センター試験 後期試験終了 卒業論文発表会 謝恩会 スケート実習	冬季休業終了 後期授業再開
2月	1~2月5日 2日~ 3日~ 7日~ 7日 8日 13~17日 19日	スキー実習(前段) 一般入試・系統別 一般入試・前期日程 一般入試・GS実技 シラバスチェック スキー実習(後段)	修士論文発表会・公聴会 春季大学院入試
3月	2日 6日 14日 19日 22日 28日 29日	一般入試・スポーツ科学部特別募集 一般入試・後期日程 卒業式 授業アンケート報告 在学生履修登録開始 在学生履修登録終了	学位記授与式(博士) 卒業式・学位記授与式(修士) 在学生履修登録開始 在学生履修登録終了

3 教員組織 (2018年度)



スポーツ科学部長 田 中 守

教 授	青 柳 領	(幼児発育発達・スポーツ計量論)
	乾 真 寛	(コーチ学・サッカー)
	岩 本 英 明	(スポーツ整形外科・スポーツ医学)
	上 原 吉 就	(スポーツ内科学・スポーツ医学・予防医学)
	柿 山 哲 治	(スポーツ教育学・保健体育科教育学)
	柿 本 真 弓	(コーチ学・ダンス・体操・新体操競技)
	片 峯 隆	(コーチ学・運動学・バイオメカニクス・陸上競技)
	川 中 健太郎	(スポーツ栄養学・生化学・分子運動栄養学)
	小牟礼 育 夫	(スポーツ方法学・バスケットボール)
	下 園 博 信	(スポーツ心理学・スポーツ方法学・ラグビー)
	田 口 晴 康	(スポーツ運動学・体操競技・器械運動)
	田 中 守	(体力学・トレーニング学・生理学・ハンドボール)
	築 山 泰 典	(野外教育学・レクリエーション)
	中 原 一	(スポーツ方法学・柔道)
	布 目 寛 幸	(バイオメカニクス)
	檜 垣 靖 樹	(スポーツ生理学・健康運動学・予防医学)
	藤 井 雅 人	(スポーツ社会学・スポーツ教育学)
	村 上 純	(スポーツ方法学・コーチ学・ラグビー)
	森 口 哲 史	(公衆衛生学・鍼灸医学・ハンドボール)
	山 口 幸 生	(運動心理学・行動科学・テニス)
	米 沢 利 広	(スポーツ方法学・バレーボール)
特任 教授	梅 田 保 人	(保健体育科教育学)
准 教 授	今 村 律 子	(保健体育科教育学・コミュニケーション論)
	坂 本 道 人	(コーチ学・柔道)
	重 森 裕	(脳神経外科学・救急医学・スポーツ健康科学)
	田 場 昭一郎	(コーチ学・競泳)
	野 口 安 忠	(コーチ学・スポーツ方法学・陸上競技)
	道 下 竜 馬	(スポーツ生理学・健康運動学)
講 師	霜 島 広 樹	(スポーツ経営管理学・スポーツ産業論)
	長 島 和 幸	(体育哲学・スポーツ史・レスリング)
	信 岡 沙希重	(コーチ学・陸上競技)
	渡 邊 正 和	(バイオメカニクス・コーチ学・硬式野球)

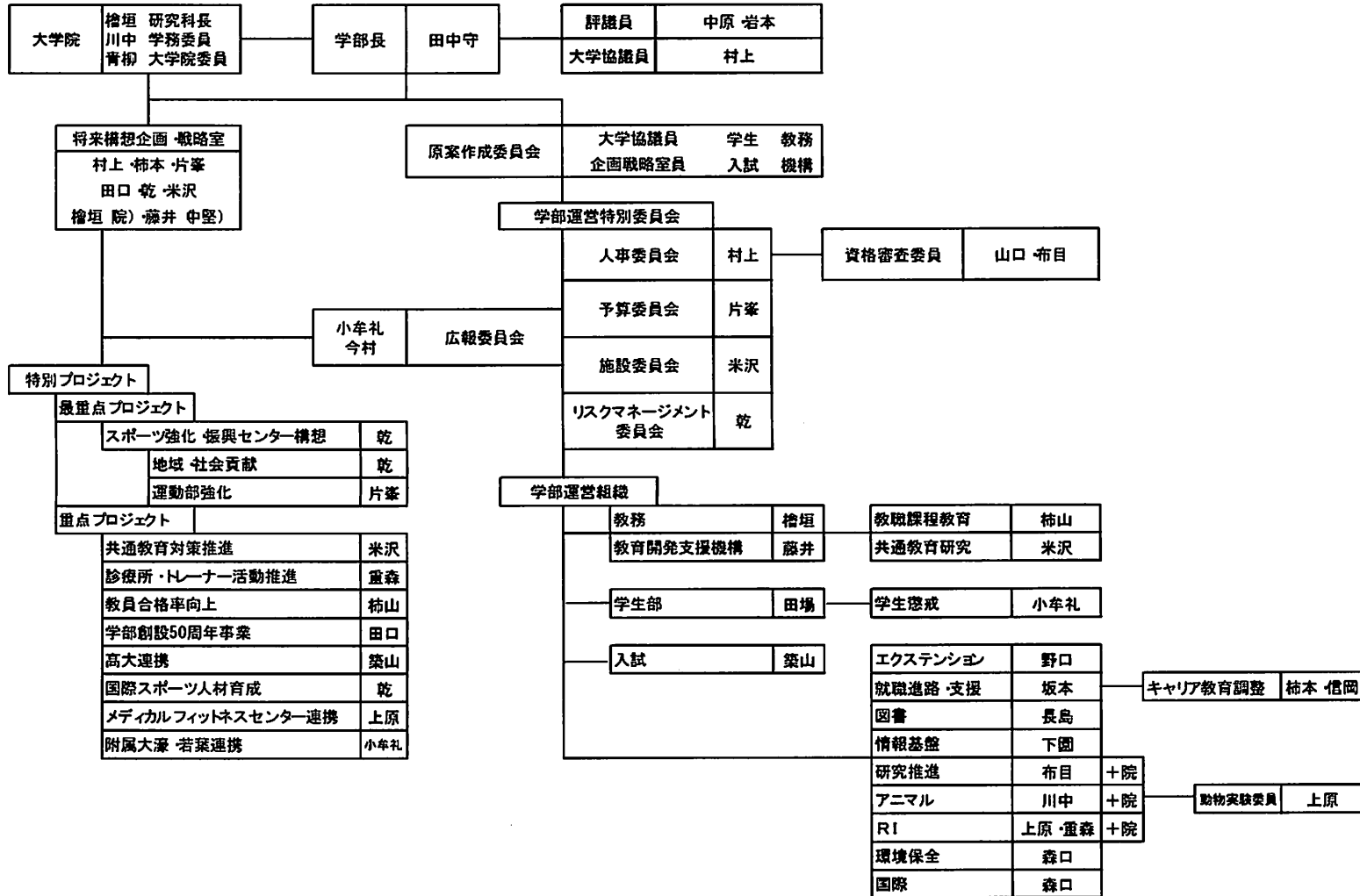
助	教	伊古塩田田中野秀広福水村森安吉羅渡	賀瀬方村原中瀬嶋崎手井方兼邊	崇裕圭慎雄麻衣子雄泰健佑一亮成孝	人裕次郎佑哉志子太郎一毅斗和惇練圭士郎	助	手	朝岡川黒高寺森好吉	野畑木橋田本岡行	新史和温大光百合郁理	菜生也子輔輝香弥瑛
---	---	-------------------	----------------	------------------	---------------------	---	---	-----------	----------	------------	-----------

大学院スポーツ健康科学研究科 担当教員 (2018年度)

スポーツ健康科学研究科長 檜垣靖樹

教	授	青岩上柿川下田田築	柳本原山中園口中山	英吉哲健太郎博晴泰	領明就治太郎信康守典	教	授	布檜藤森山今重塩羅	目垣井口村森瀬	寛靖雅哲幸律圭成	幸樹人史生子裕佑圭
						准	教				
						助					

スポーツ科学部教員組織図



4 入試状況、学生数及び卒業生数、出張講義

(1) スポーツ科学部

築山 泰典

■ 推薦入試

A方式推薦入試に関し、スポーツ科学科では、募集人員54名に対し、志願者112名で合格者56名(競争率2.0倍)であった。また、健康運動科学科では、募集人員16名に対し、志願者27名で合格者17名(競争率2.3倍)であった。両学科の競争率は2.0倍と2.3倍とバランスを保っているように見られるが、募集人員の少ない健康運動科学において第2志望合格を継続実施している。

次に、スポーツ特別推薦に関しスポーツ科学科では、志願者51名に対し合格者47名(競争率1.1倍)、健康運動科学科では志願者3名に対し合格者3名(競争率1.0倍)、合計50名の合格者であった。スポーツ特別推薦は、全学として87名の出願に対し80名の合格者があったが、合格者に占める本学部への合格者の占める割合は62.5%であった。

推薦入試状況

学科	A方式推薦入試					スポーツ特別推薦入試			
	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	募集人員	志願者	合格者	競争率
スポーツ科	54	112	112	56	2.0	50程度	51	47	1.1
健康運動科	16	27	27	* 17	2.3		3	3	1.0

競争率=受験者÷合格者(第二志望合格者を除く)、(スポーツ特別推薦入試は志願者÷合格者)*欄は第二志望合格者(5人)を含む

(福岡大学入試状況サイト入試状況表から一部抜粋)

■ AO入試

スポーツ科学科に関しては、募集人員33名に対し、志願者148名で合格者33名(競争率4.5倍)であった。また、健康運動科学科に関しては、募集人員7名に対し、志願者37名で合格者7名(競争率7.4倍)であった。また、健康運動科学科では第二志望合格5名を含むためスポーツ科学科と比べ高い競争率となった。

AO入試状況

学科	募集人員	公開練習会等の参加者	志願者	合格者	競争率
スポーツ科	33	299	148	33	4.5
健康運動科	7		37	* 7	7.4
合計			161	40	185

競争率=受験者÷合格者(第二志望合格者を除く)*欄は第二志望合格者(5人)を含む

(福岡大学入試状況サイト入試状況表から一部抜粋)

■ 一般入試

系統別日程では、スポーツ科学科が、募集人員7名に対し、受験者112名で合格者33名(競争

率 3.4 倍)であった。また、健康運動科学科は、募集人員 2 名に対し、受験者 78 名で合格者 17 名(競争率 5.2 倍)であった。

前期日程では、スポーツ科学科は募集人員 68 名に対し、実技型においては受験者 248 名で合格者 73 名(競争率 4.5 倍)、小論文型においては受験者 78 名で合格者 22 名(競争率 3.2 倍)であった。また、健康運動科学科は募集人員 20 名に対し、受験者 153 名で合格者 36 名(競争率 4.3 倍)であった。

後期日程では、スポーツ科学科が募集人員 7 名に対し、受験者 28 名で合格者 7 名(競争率 4.0 倍)であった。また、健康運動科学科は募集人員 3 名に対し、受験者 35 名で合格者 3 名(競争率 11.7 倍)であった。

センター試験利用入試Ⅰ期では、スポーツ科学科が募集人員 8 名に対し、受験者 101 名で合格者 23 名(競争率 4.4 倍)であった。また、健康運動科学科は募集人員 3 名に対し、受験者 57 名で合格者 20 名(競争率 2.9 倍)であった。

センター試験利用入試Ⅱ期では、スポーツ科学科が募集人員 6 名に対し、受験者 70 名で合格者 11 名(競争率 6.4 倍)であった。また、健康運動科学は募集人員 3 名に対し、受験 36 名で合格者 4 名(競争率 9.0 倍)であった。

系統別日程状況

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	追加合格者	合格最高点	合格最低点
スポーツ科	7	114	112	33	3.4		377	251
健康運動科	2	78	78	17	4.6		314	252

前期日程状況

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率	追加合格者	合格最高点	合格最低点
スポーツ科	68	実技型						
		248	242	73	3.3	0	268	180
		小論文型						
		70	70	22	3.2	0	210	177
健康運動科	20	155	153	36	4.3	0	230	190

後期日程状況

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	7	29	28	7	4.0
健康運動科	3	35	35	3	11.7

センター試験利用入試 I期

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	8	101	101	23	4.4
健康運動科	3	57	57	20	2.9

センター試験利用入試 II期

学科	募集人員	志願者	受験者	合格者	競争率
スポーツ科	6	70	70	11	6.4
健康運動科	3	36	36	4	9.0

競争率=受験者÷合格者

(福岡大学入試状況サイト入試状況表から一部抜粋)

■ 学生数及び卒業生数

平成30年5月1日段階でのスポーツ科学部学生数は、スポーツ科学科950名(1年次226名、2年次226名、3年次230名、4年次以上268名)、健康運動科学科306名(1年次70名、2年次77名、3年次73名、4年次以上86名)の合計1,256名である。

また、平成30年度の学部卒業生数は295名であった。

学生数

(平成30年5月1日現在)

		1年次	2年次	3年次	4年次以上
スポーツ科学科	950	226	226	230	268
健康運動科	306	70	77	73	86
合計	1,256	296	303	303	354

■ 出張講義

2018年度入学センターより依頼があり実施した出張講義・模擬講義数は14件(生徒総数771名)と昨年度18件(生徒数1,188名)より減少した。福岡県下での実施が7件と最も多いが、鹿児島県3件、熊本県2件、大分県広島県が1件ずつと、学部教員の協力により実施することができた。出張講義ガイドブック「福岡大学模擬講義NAVI」には、本学部教員17名も掲載されている。また、引き続きマリンメッセ福岡で開催された「夢ナビライブ2018」に参画し、174名の生徒と直接かかわる機会を得た。

■ 平成 30 年度入試

アスリート推薦入試

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	0	0	0

一般入試

	秋季*			春季*		
	志願者	受験者	合格者	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	1	1	1	3(2)	3(2)	3(2)
博士課程後期	1	1	1	0	0	0

* () 内 社会人

外国人留学生入試

	志願者	受験者	合格者
博士課程後期	0	0	0

推薦入試**

	志願者	受験者	合格者
博士課程前期	5(4)	5(4)	5(4)

** () 内 早期履修者数

■ 平成 30 年度の学生数及び修了生数

学生数 (平成 30 年 5 月 1 日現在)

		1 年次	2 年次 (留年者含む)	3 年次 (留年者含む)
博士課程前期	21	10	11	
博士課程後期	11	2	3	6
合計	32	12	14	6

平成 30 年度の修了生については、博士課程前期修了 8 名が学位（修士号）を取得。博士課程後期修了 1 名が学位（博士号）を取得し、満期退学が 0 名であった。

5 教育活動

(1) 入学前教育

築山 泰典

平成 31 年度 AO 入試及び推薦入学合格者に対して、外部業者と連携し、基礎国語 3 講、スポーツ科学入門 7 講の計 10 講からなる通信教育形式による入学前教育を実施している。今年度は、課題提出率が 91.7%であった。

基礎国語

- 1 講：PC 時代に相応しい言葉力をつける・ノートを作る
- 2 講：ことばを自分のものにする(短文作り)
- 3 講：目の前のものを正確に描写する

スポーツ科学入門基礎

- 1 講：「スポーツ科学」の研究領域
- 2 講：身体の構造と機能
- 3 講：フィットネス・トレーニング
- 4 講：スポーツのスキル
- 5 講：アスリートの身体管理
- 6 講：運動の効果とスポーツ損傷
- 7 講：データの処理

(2) 新入生懇談会

田場 昭一郎

新入生学部指導懇談会は、以下の内容を新入生に理解させ、活力ある学生生活となるための動機づけを行うものとし実施している（参加者 326 名：学生 295 名、教職員 31 名）。

- 1) 福岡大学の校訓を理解し、充実した学生生活を送るための諸注意。
- 2) スポーツ科学部生としての自覚を促し、スポーツ活動に専心する心構えと勉学に励む態度を啓発する。
- 3) 各種委員からのガイダンスにより、学生生活を円滑に始められるようにする。

<日 時> 平成 30 年 4 月 4 日（水曜日） 9 時集合（開会 9 時 15 分）

<場 所> A 棟 201 教室および第二記念会堂体育館

<内 容> スポーツ科学部長挨拶

健信会会長挨拶

総務委員からの案内

学生部ガイダンス（大学生活に関わる諸問題とその対応について）

福大生ステップアッププログラム「先輩と語る」

海外研修報告

- ① 体育・スポーツのエキスパート教育プログラム
- ② JICA ボランティア派遣事業プログラム

日本語能力基礎調査

各種委員会からの連絡と諸注意

- ① 就職進路支援センター委員
- ② 国際交流センター委員
- ③ 図書委員
- ④ 健康管理センター
- ⑤ HD センター
- ⑥ 福岡リーガルクリニック法律事務所

早良警察署による連絡と諸注意（防犯・交通マナー講習）

福岡大学校歌の斉唱

スポーツ科学部教職員スタッフ紹介

各担当教員によるクラス担任別懇談会（グループディスカッション）

部活動アンケート調査

例年、スポーツ科学部の学部行事として新入生懇談会を実施している。本会では、学部生が授業で使用する学部ユニフォーム（赤色のジャージ）を着用して参加することを義務付け、さらに挨拶励行、行動敏速、時間厳守を徹底し、この会を通じて、体育・スポーツに関わる者として、体を動かすことの社会的役割や生涯的価値を学ぶ先駆けとなるよう心掛けている。

スポーツ科学部長より、入学後にスポーツ科学部生として自覚を持つ事、学部のカリキュラム・ポリシーを十分に理解して自己研鑽に励む事、文武合一して多くのことを学んでもらいたいとの挨拶が行われた。健信会会長（福岡大学スポーツ科学部の同窓会）より、有信会（福岡大学の同窓会）との関わりや、卒業生との帰属意識を高めることの意義について説明が行われた。学生部ガイダンスでは、学生生活を送るにあたっての諸注意、困った時の学内における対応窓口について、さらに実際の学生生活で起こりうる諸問題などの事例を挙げ説明された。

また、スポーツ科学部の年間行事で新入生学部指導懇談会とスポーツ科学部祭を実施しているが、これらの行事において「福大生ステップアッププログラム先輩と語る—大学と社会—」を企画し、本学部を卒業した先輩方へ講話を依頼している。平成30年度は、世界体操選手権日本代表の安里圭亮先輩にご講話を頂いた。学生時代につり輪の練習中に落下し、選手生命を脅かす左肩の怪我を負った経験談、のちに得意の跳馬を開花させて種目別で準優勝という結果を納め、卒業後に日本代表に選出された経験から「出会いととチャンスの見極め」についての講話であった。世界を目指すアスリートの話は、競技スポーツに携わる学生にとって非常に興味深く、新入生も熱心に話を聞いていた。

さらに海外研修報告では、「ピークパフォーマンス演習 II」の授業と並行し「体育・スポーツのエキスパート教育プログラム」を利用して海外研修に行った学生のプレゼンテーションが行わ

れ、特に競技においてトップアスリートを目指す新入生にとって貴重な発表内容であった。また「JICA ボランティア派遣事業プログラム」を利用して海外研修に参加した野球部とサッカー部の学生の発表も行われ、このプレゼンテーションも JICA と提携したスポーツの普及活動として、「スポーツを支える」という観点から行われている企画で、慣れない土地での先輩方の活躍に、新入生も興味を示す様子が伺えた。

また、この懇談会で実施している日本語能力基礎調査は、1年次生の必修講科目であるフレッシュマンセミナーの文章力講座と関連付けており、各教員が行うクラス面談で学生にフィードバックされ、入学後の文章力向上のための指導に役立てている。

最後に、スポーツ科学部の各種委員（就職進路支援センター委員、国際交流センター委員、図書委員）と、学内の各種センター（健康管理センター、ヒューマンデベロップセンター、福岡リーガルクリニック法律事務所）など、学内での施設や受付窓口に関する事細かな説明が行われた。そして、スポーツ科学部の教職員紹介、各教員別のクラスに分かれてのグループディスカッションとアンケート調査を実施した。

(3) クラス面談・修学指導

田場 昭一郎・米沢 利広

■ クラス面談について

スポーツ科学部では、1・2年次生を対象にクラス別個人面談（グループディスカッション）を実施している。クラス別個人面談は、講師以上の専任教員が10～12名程度のクラスを担当し、定期的に学生の実態調査を行うもので、学生の生活状況や生活態度を把握するとともに、学生に対する注意喚起を行っている。大学生活を通じての授業、所属する運動部やサークル等の課外活動、アルバイト等の活動における問題点や悩みなどに対応し、個々にアドバイスできるような指導体制である。なお、面談については以下の通りである。

- 1) 新入生懇談会でグループディスカッション（4月4日）
- 2) 各担当教員における1年次生を対象とした個人面談（前後期に各1回）
前期：7月9日～7月20日・後期：9月26日
- 3) 各担当教員における2年次生を対象とした個人面談（前後期に各1回）
前期：5月14日～25日・後期：10月1日～10月12日

1年次生は、学士課程の教育充実を図るために、基礎教育と導入教育を目的とした「フレッシュマンセミナー」が開講されており、その授業の1コマとして前後期に各1回ずつクラス面談を実施している。

2年次生は、継続的な指導として、1年次に担当した教員により引き続き個別指導が実施され、前・後期にクラス面談が行われる。

3年次生以降は、必修科目である卒業論文の事前指導として開講されている「スポーツ科学演習」を履修するため、各担当教員のゼミナールに所属し、その後、卒業までゼミナールの担当教員によって個別指導が行われる。

スポーツ科学部では、このような取り組みによって徹底した学生の指導体制を構築しており、学生も様々な立場にある教職員のアドバイスを受け、4年間の充実した学生生活が期待され、その成果は非常に大きい。

■ 修学指導について

スポーツ科学部は、前述した通り全学生を対象としたクラス別個人面談と修学指導対象の学生に対して面談を実施している。クラス面談に加えてさらに指導が必要な学生には、教務委員、学生部委員、入試委員、教務関係担当の教職員によって修学指導を実施している。対象となる学生は以下の通りである。

- 1) 2年次生：前年度の取得単位数が23単位以下の学生（登録単位数の半分以下の学生が対象）
- 2) 3年次生：前年度までの取得単位数が46単位以下の学生
- 3) 4年次生以降：1～3年次までの取得単位数が77単位以下の学生（卒業見込みなし）

面談については、例年通り修学指導記録書に「なぜ単位を取れなかったのか？」「今後の対応はどうするのか？」といった点を記録して学生の指導を行った。単位が取れなかった学生の理由としては「授業の欠席が多いこと」「試験勉強が十分にできなかったこと」「試験そのものができなかったこと」が挙げられた。1年次生の時には安易に単位が取れると油断して単位が取れなかった学生や、試験勉強の方法がわからない学生もいた。このような点を踏まえて、試験勉強に対するアドバイス、授業への出席の指導、今後の進路に対するアドバイスを行った。

学部・年次別の単位修得不振者の状況%（前年）

（2019年4月1日現在）

	平成30年度入学生 (18台)	平成29年度入学生 (17台)	平成28年度入学生 (16台)
修得単位 学部・学科	30単位以下	60単位以下	90単位以下
スポーツ科学部	6.5	9.0(10.2)	7.3(11.0)

（2019年父母懇談会のしおりP10より抜粋）

（4）フレッシュマンセミナー授業方法

柿山 哲治・山口 幸生

本セミナーは、学生自身が「如何に学び、社会に貢献するか」について自問自答ながら自学自習を实践し、スポーツ科学部生としての規範とスポーツ科学部で学ぶ専門領域を理解し、卒後の進路と目標を明確に示すことができるようになることを目的としている。

授業内容は、1) 田中守学部長による「スポーツ科学部生として、理論と実践が融合した文武合一のすすめ」、2) 体育学部一期生の水原博而氏による「体育学部の歴史からその伝統と誇り」、3) コンピテンシー診断テスト、4) 外部講師による文章力講座、5) 日本語能力基礎調査、6) オリンピアンDeeDee Trotter氏による“I Can. I Must. I Will.”、7) 教育開発支援機構の須長一幸准教授の支援による「言葉の力」、8) スポーツ科学部全教員による専門性を生かした講義、9) スポーツ科学部全教員による1年次学生に対する個別の就学指導、などで構成されている。以下に、特筆すべき取り組みについて記載する。

コンピテンシー診断テストは、本学就職支援センターの協力を得て、テストの実施とその結果の解説を実施している。コンピテンシーとは、高い成果を生み出す人の特徴的な行動特性のことをいい、学生生活で身につけたい6つの力、要望に応える力、新しい価値を創る力、何かを変える力、きちんとやる力、自らを活かす力、互いを活かす力を評価し、解説を加えることで、学生への気づきを促している。

文章力講座はリメディアル教育として位置づけ、平成22年度から中学・高校で国語教員を務めた退職教員に講師依頼し、作文を主な課題とした内容を実施している。基本的目標として「説明的文章(論理的文章)」の作文力を向上させることを掲げている。具体的には、単に語彙を向上させることだけでなく、1) 読み手を意識した文章が書けるようになる(入学当初に書いた課題作文を改めて論理的文章として練り上げる)、2) 自分をしっかりと見つめた文章が書けるようになる(大学卒業後の人生をしっかりと見定め、今後の自分の生き方の指針になりうる文章に仕上げる)、3) 大学生活に必要なレポート・論文作成の基本がわかり、書けるようになる(基礎知識の復習と演習を通して基本的スキルを学び、それを活かした文章を仕上げる)というものである。実際の授業では、担当教員らが作成した教材を利用し、作文作成の基本を再学習した上で課題作文を仕上げている。

講座の開始前(4月)と終了時(7月)には「日本語能力基礎調査」を実施している。測定結果は、文章力講座の授業時およびクラス面談(各専任教員が1学年11名程度を担当)時に配布し、1年生の基礎学力把握と学習指導の資料として有効に活用している。受講した学生の評価は多くが肯定的であり、50~60%の学生が「読み手意識を持った文章を書けるようになった」と回答している。

日本語能力基礎調査は、本講座開始当初より使用していた語彙力の豊富さを判定する「日本語力判定テスト」を、平成29年度より「日本語能力基礎調査」に切り替えて実施している。本調査は語彙力に限定せず、日本語力の多様な側面を評価可能であり、学生個人への豊富なフィードバックが可能である。

言葉の力プログラムは、1) グループで学習するための基本的なノウハウを身につけ、実践する、2) 論理的な文章の構造を把握し、実際にそうした文章の骨格を作る、をねらいとして展開している。テーマは、①「部活動において厳しい上下関係は必要か」、②「中高生に対する体罰を用いた指導は意味があるのか」など、身近な課題を用いている。具体的な例を掲げてディスカッションすることで議論の深まりが感じられ、関連する要因の可視化は論点の整理に有用と思われる。なお、2018年度は教育開発支援機構の支援を仰ぎながら、①を檜垣、②を柿山が担当した。

なお、2018年度はロンドン五輪(400m×4)金メダリストのDeeDee Trotter氏による特別講演“I Can. I Must. I Will”を、在学生にも参加を呼びかけて2018年5月30日(水)に開催した。

○フレッシュマンセミナーⅠ

回数	1	2	3	4	5
日付	4月11日	4月18日	4月25日	5月2日	5月9日
Aグループ	○田中守学部長： フレッシュマンセ ミナーのねらいと 実践 ○水原先生（体育 学部1期生）：新た な後輩たちへ。	文章力講座（外部講師）30名/クラス、5クラス			
Bグループ		○コンピテンシ ー診断テスト	○山口先生 ○梅田先生	○長島先生 ○道下先生	○岩本先生 ○下園先生
回数	6	7	8	9	10
日付	5月16日	5月23日	5月30日	6月6日	6月13日
Aグループ	文章力講座（外部講師）30名/クラス、 5クラス		○ディーディー・ トロッター講演会	○コンピテンシ ー診断テスト	○山口先生 ○梅田先生
Bグループ	○重森先生 ○霜島先生	○コンピテンシ ー診断テスト事 後フォロー講座		文章力講座（外部講師）30名/クラス、 5クラス	
回数	11	12	13	14	15
日付	6月20日	6月27日	7月4日	7月11日	7月18日
Aグループ	○長島先生 ○道下先生	○岩本先生 ○下園先生	○重森先生 ○霜島先生	○コンピテンシ ー診断テスト事 後フォロー講座	○日本語能力基礎 調査
Bグループ	文章力講座（外部講師）30名/クラス、5クラス				○授業アンケート

○フレッシュマンセミナーⅡ

回数	1	2	3	4	5
日付	9月19日	9月26日	10月3日	10月10日	10月17日
Aグループ	○藤井先生 ○乾先生	クラス別個人面 談 （第2記念会堂 フロア集合）	○米沢先生 ○今村先生	○渡邊先生 ○信岡先生	○檜垣先生 ブレインストーミ ング① （須長先生他、教 育開発支援機構）
Bグループ					
回数	6	7	8	9	10
日付	10月24日	10月31日	11月7日	11月14日	11月28日
Aグループ	○柿山先生 ブレインストーミ ング② （須長先生他、教育 開発支援機構）	○柿本先生 ○坂本先生	○野口先生 ○田口先生	○築山先生 ○片峯先生	○布目先生 ○川中先生
Bグループ					
回数	11	12	13	14	
日付	12月5日	12月12日	12月19日	1月9日	
Aグループ	○森口先生 ○青柳先生	○村上先生 ○田場先生	○小牟礼先生 ○中原先生	○上原先生 ○授業アンケー ト	
Bグループ					

1) 本講座の背景

2018年度の全国大卒求人倍率は、1.88倍（リクルートワークス研究所調べ）と、7年連続の上昇となり企業の採用意欲の高い状況が続いている。本学部の就職率は、男子94.8%、女子95.3%、全体94.9%であった。就職率だけをみると、就職状況は良好であるといえるが、今後、本学部が就職支援において目指すべきものは、学生個々の就職満足度の充実にあるといえよう。

2) 本講座のねらい

2018年度の就職活動開始時期については、前年度同様、企業の広報活動日が3月1日以降、選考活動開始日が6月1日以降であり、短期決戦型と言われる状況が続いている。このような状況を受けて本講座は、学生がよりスムーズに充実した就職活動を展開できるよう、活動を開始する直前の2年次後期に開講されている。内容については、各方面から本学部生に関係の深い職種や学生の要望に沿った講師の方々を招聘し、自身の体験談、社会の実情、現時点で身につけておくべきスキルなど様々な内容が盛り込まれている。また、今や就職試験や採用試験では一般的であるSPIの小テストを毎時間実施するなど、継続的に一般教養力を高めることも併せて取り組んでいる。このように、学生一人一人の就職活動に対する興味を促し、この時期に何を考え、何を準備しておくべきかを考えさせることが本講座のねらいである。

3) 今年度の新たな取り組み

今年度においても、授業アンケートによる学生の意見や、前述した採用側の状況などを考慮し、講義スケジュールの作成に取り組んだ。今年度の取り組みとしては、近年の公務員志望者増加に伴う措置として、これまでに引き続き現役消防官による講義を取り入れた。また、青年海外協力隊経験者や一昨年度本学と独立行政法人国際協力機構（JICA）の間で締結されたボランティア事業経験者による講義も継続的に取り入れ、グローバル人材育成も視野に入れた内容とした。さらには、近年、文部科学省において大学教育を通じたジェネリックスキル育成への期待が高まっていることを受け、コンピテンシーテストとその後のフォローアップセミナーも併せて実施した。昨年度と比べ新たに工夫した点については、幼児体育やミズノ株式会社など、本学部生の特性を活かしたスポーツ関連企業との係わり方について考える時間を新たに設けた。

4) 成果と課題について

本授業に対して学生からは、「就活のために備えておくことや、これから先何が必要なのかを学ぶことができた。」、「授業前よりも将来のことを真剣に考えるようになった。」、「今日の講義を聞いて、思いを行動に移すことの大切さを知ることができた。」、「JICA 青年海外協力隊はよく耳にしていたので、どんな仕事をするのか？他国での生活はどんなものか？給料はどんな仕組みなのか？など詳しい情報を知ることができ、とても勉強になった。」、「野球部、サッカー部の JICA の活動を聞いて、まったく言葉が通じない国での活動は非常に大変で、整っていない環境に慣れることも難しいと思うが、そこから得るものが多くあるのだろうと感じた。海外でのそういった活動も面白そうでいいなと感じた。」など、授業全体に関するものに加え各分野に対する興味・関心の高さを表す感想も多数見受けられた。

また、コンピテンシーテストならびに、フォローアップセミナーでは、このたび受験した2年次生全員にテスト結果を返却し、データの見方から考え方にいたるまでを懇切丁寧にご指導いただいた。学生からは、「自分自身の強みやアピールポイントを知ることの大切さを学ぶことができた。」、「コンピテンシーテストにおいて自己分析をすることができ、自分の長所や短所を見つけることができた。今後の自分の成長に役立てたい。」などの感想が見受けられた。

このように、今年度も本講座にける学生の評価は得られたのではないかと考える。しかしながら、学生を取り巻く就職状況は前述のとおり毎年大きく変化している。本講座においても、それらの変化に対する迅速な対応が求められている。今後の本講座における課題については、昨年、日本経済団体連合会（経団連）が発表した「採用選考に関する指針の撤廃」に対する対策があげられる。これにより、これまでよりも就職活動時期が前倒しになることが予測され、早めの動機付けを行っていく必要があると考えられる。その他にも、インターンシップ（就業体験プログラム）関係講座の積極的な導入や、本学の教育理念にもあるグローバル人材育成に即した、海外留学という選択肢の話題にも力を入れる必要があると考える。これらの点を来年度以降に向けた課題として、本講座の更なる充実を図っていきたい。

6 研究活動

(1) スポーツ科学部

布目 寛幸

■ 共同研究プロジェクト

福岡大学とミズノ株式会社との連携・協力協定に基づき、その中心となるスポーツ科学部では、以下2つの研究プロジェクトが進行中である。

研究題目①

「肉体労働サポートツールウェアの効果に関する研究」

近年、肉体労働者の労働環境の改善が緊急の課題となっており、先行調査によれば、8割を超える肉体労働作業従事者が腰痛を主とする身体の不調を抱えている。本研究では、このような作業者に対して、肉体労働サポート機能（腰痛防止ベルト等）を備えたツールウェアを開発することで身体的な負担を軽減し、慢性的な職業病や身体の不調などの労働環境を改善することを目指す。

研究題目②

「フットサル用シューズにおけるシューズーサーフェイス相互作用に関する研究」

機械的なトラクション性能と実際にヒトが利用可能なトラクション性能を明らかにすることで、プレーしやすいフットサルシューズのアウトソール形状・パターンに関する基礎的知見を得ることを目指す。

その他、外部資金による研究は、科学研究費補助金による研究18件、受託研究3件、研究助成寄付金4件、共同研究8件が稼働中である。主な共同研究先は、中村学園大学、春日市立天神山小学校、慶應義塾大学、京都大学、パナソニック（株）、エコソリューションズ社、サントリー食品インターナショナル（株）、コカ・コーラボトラーズジャパン（株）、ノバルティスファーマ（株）、第一三共（株）、（社）10分ランチフィットネス協会、（株）ドリームジーピー、（株）ハルメクなどである。

■ 研究施設の拡充

第2 記念会堂一階に、スポーツ栄養学実験室を整備するとともに、大学院講義室、ゼミ室Ⅰ～Ⅲ、1211 講義室が整備されることで、特にスポーツ栄養学に関する研究体制が整備されたとともに、各研究室のゼミ活動を支援する体制が整備された。

(2) スポーツ健康科学研究科

檜垣 靖樹・川中 健太郎

まず、スポーツ健康科学研究科博士課程後期では、吉村咲紀氏が「高脂肪食誘発性脂肪肝モデルマウスに対する運動の効果」をテーマに学位審査の最終試験に合格し、博士の学位を取得した。また、この最終審査には副査として福岡大学筑紫病院の浦田秀則教授が加わった。指導の労に対して心より感謝申し上げたい。前期課程では、8月に中間報告会、2月に修士論文発表会が開催

され、最終的には8名が最終試験に合格した。その中で、飯澤拓樹氏が参加した教員の採点で最高点を獲得し、優秀発表賞を受賞した。

国際交流に関しては、釜山国立大学スポーツ科学研究科との学術交流会が会場を隔年ごとに持ち回ることにより行われている。本年度は釜山大学の Seonghok Hall で開催された。本学からは教員6名（檜垣、川中、山口、柿山、布目、羅）が参加し、本学大学院生からは Ms. Nanami Abe、Mr. Koki Kato、Ms. Mana Hatanaka、Mr. Ryota Shimohara、Mr. Taiki Yamamoto の5名が英語による研究発表を行った。釜山側からも5名の大学院生が発表を行った。

発表会の後、釜山国立大学スポーツ科学研究科の研究室と研究科に付属する体育施設の見学があった。夜には、教員と学生に別れ、懇親会が開催され、質疑応答では不十分な点について議論が交わされた。



釜山国立大学で行われた学術交流会の参加者の集合写真

7 学部 FD・SD 活動

(1) シラバス点検

藤井 雅人

スポーツ科学部では、毎年教務委員が中心となって、非常勤講師を含むスポーツ科学部専門科目担当教員から提出された次年度用の全シラバスの確認作業を行っており、平成 30 年度で 9 年目を迎えることとなった。なお、この確認作業はこれまで 1 月中旬に実施されてきたが、今年度よりシラバス提出期限が延長されたため 2 月初旬に行われることとなった。

平成 31 年度シラバスの確認作業は、2019 年 2 月 7 日に、スポーツ科学科の確認作業担当者（下園博信、今村律子、田場昭一郎）、健康運動科学科の確認作業担当者（藤井雅人、森口哲史、山口幸生）および確認作業担当者作成確認者である教務委員の檜垣靖樹が行った。その際、シラバスチェック委員会が作成した「シラバスチェックのポイント」を参考に、「専門教育科目の到達目標」「授業時間外の事前事後学習時間の記載」「成績評価基準および方法」等の項目について確認を行った。昨年度までと同様に、「専門教育科目の到達目標」については、「学生が主体で書かれているか」「具体的に箇条書きされているか」「客観的に測定できる目標を設定しているか」、また「成績評価基準および方法」については、「評価基準、評価方法、割合に分けて書いてあるか」「到達目標に対する評価基準が記載されているか」「評価基準は測定可能なものになっているか」等の観点で記載内容をチェックするとともに、今年度は「授業時間外の事前事後学習に関して、必要な時間の目安が記載されているか」についても確認を行った。その際に適切でない判断された内容については、科目担当者に修正の上、再提出するよう求めた。その後再提出されたシラバスの修正箇所については、2 月 19 日までに、確認作業担当者によって全ての確認が完了した。こうした確認・修正の取り組みもあって、平成 31 年度シラバスは全体的に見て、「シラバス作成のためのガイドライン」に則って適切に記載された内容に統一されることとなった。

(2) 学外研修参加

藤井 雅人

平成 30 年度は、スケートおよびスキー実習担当者の中から計 4 名が、以下の学外実技研修に参加した。

- ・平成 30 年 12 月 15・16 日に長野県帝産アイススケートトレーニングセンターで開催された、大学スケート研究会主催の「第 60 回大学体育指導者スケート研究集会」に、霜島広樹、渡邊孝士郎の 2 名が参加した。
- ・平成 30 年 12 月 26～28 日に岐阜県平湯温泉スキー場およびほうのき平スキー場で開催された、公益社団法人全国大学体育連合東海支部主催の「平成 30 年度冬期スノースポーツ研修会」に、スキー研修を目的に朝野新菜、黒木温子の 2 名が参加した。

上記の学外実技研修参加者によって作成された詳細な報告書は教授会において報告され、研修内容の情報共有が図られた。また、スケートおよびスキー実習中に研修参加者から他教員への研修内容の伝達にも取り組まれた。

さらに、古瀬裕次郎が、2019年3月13・14日に熊本市の神園山荘で開催された、公益社団法人全国大学体育連合九州支部、九州地区大学体育連合主催の「2019（平成31）年 春期 体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」に参加した。古瀬による本教育研究会議についての報告書は2019年度4月の最初の教授会において、特にシンポジウム「大学体育の研究手法～研究の質向上に向けて～」の内容と自身による研究発表に関わって報告される予定である。前者では、大学体育研究の質向上が一般体育授業の質向上にもつながることから、九州地区でも大学体育研究の水準を上げていくこと、後者では、一般体育授業の意義を裏づけるような初年次学生の体力測定データの活用方法を確立することが今後の課題であるとされている。

(3) ワークショップ、研修会の開催

藤井 雅人

2019年1月18日にスポーツ科学部第二記念会堂1222教室において、平田史昭氏（株式会社リアセック「タクナル」開発グループ）を講師とする「コンピテンシーテストの結果を用いたアクティブ・ラーニング型教育の実践」と題した平成30年度スポーツ科学部主催FDワークショップを開催した（資料1）。本FDワークショップには、スポーツ科学部から講師以上の専任教員および助教・助手を合わせて計55名、教育技術職員および事務職員計3名、さらに教育開発支援機構から関係教員（工学部所属教員含む）計3名および事務職員1名、総計62名が参加した。

平成27・28・29年度に引き続き、平成30年度のFDワークショップも「学生のコンピテンシー」をキーワードとして開催された。ただし、本年度のワークショップでは、過去3回のワークショップの成果を受けて、スポーツ科学部の実情により即したコンピテンシーテストの結果活用に基づく、実践的な教育方法の開発および次年度からのその試行実施について議論することを目指した。

具体的には、平田氏を講師とする、「議論を通じて問題解決を高めるPBL（Project Based Learning）」としてリアセック社のジェネリックスキル研究、大学生向けキャリア教育などのプログラム開発の実践研究から生み出されたプログラム「タクナル」の理解と体験を通して、カリキュラムへの「タクナル」の導入とそれに伴うコンピテンシーの向上の可能性、およびこれまで実施してきているコンピテンシーテストを用いての「タクナル」の効果検証について議論された。導入時期や授業回数などの観点で小さくない課題はみられるものの、少なくともこの種のアクティブ・ラーニング型授業の導入の必要性については参加者間でコンセンサスが得られたといえ、今後引き続き「タクナル」の導入について検討されることとなった。

なお、上記のFDワークショップに先立って、平成30年7月30日にスポーツ科学部第二記念会堂1222教室において、筑波大学体育系ヒューマン・ハイ・パフォーマンス先端研究センター長の征矢英昭教授を講師とする、大学院スポーツ健康科学研究科主催FD研修会「ヒューマン・ハイ・パフォーマンス先端研究センターの取り組みについて」を開催した。参加者は、スポーツ科

学部の講師以上の専任教員および助教・助手計 37 名であった。本 FD 研修会参加者は、同センターの設立に至るまでの経緯とその困難さ、現在までの成果や展望、さらには今後の課題などに関して理解を深め、福岡大学での研究・教育へのその活用について議論することができた。

(4) 授業アンケート（旧授業アンケートの結果の各教員への通知、アンケート結果の公開、各教員による報告書の提出、報告書のまとめ；新授業アンケート「FURIKA」の実施および結果のフィードバック； 藤井 雅人『福岡大学スポーツ科学部授業アンケート報告書 - 平成 26 年度から平成 29 年度までの歩み - 』の刊行)

平成 30 年度は、例年と異なり、「授業アンケート」に関わる以下の 3 項目について報告する必要がある。すなわち、①平成 29 年度まで実施されてきた「旧」授業アンケートに関わる項目、②今年度から導入された「新」授業アンケート「FURIKA」に関わる項目、③『福岡大学スポーツ科学部授業アンケート報告書 - 平成 26 年度から平成 29 年度までの歩み - 』の発刊に関わる項目である。

まず「①」について述べてきたい。スポーツ科学部では、平成 22 年度から平成 29 年度後期まで、すなわち平成 30 年度前期に後述の「新」授業アンケート「FURIKA」が導入されるまで、各科目担当者によって受講生を対象とする「旧」授業アンケートを実施してきた。その授業アンケート実施後は、業者による集計作業がなされ、次学期はじめに各教員に各科目についての集計結果が通知されてきた。したがって、平成 30 年度には平成 29 年度後期に実施した授業アンケートの集計結果が取り扱われたことになる。そして、その結果について、各科目を共通教育科目である「生涯スポーツ演習」「生涯スポーツ論」、および学部専門教育科目である「専門実技科目」「専門講義科目（必修）」「専門講義科目（選択）」「実験・実習・演習科目」「スポーツ科学演習・卒業研究論文」に分類し、それぞれの科目領域の平均点を学部施設内掲示板および学部ホームページ上で公開した（資料 2）。さらに、教員が学部事務室において全ての科目の集計結果を閲覧できるようにした。

スポーツ科学部では各教員に、授業アンケートの結果に基づき講義および実技それぞれ 1 科目について「シラバスに示した到達目標に対する自身の評価と学生の達成状況について」「今回の改善点とそれによる学生の反応について」「次回の改善点について」という 3 つの項目に関して記述した「授業改善報告書」の提出を義務づけてきた。平成 30 年度には、平成 29 年度後期授業アンケートの結果を受け取った講師以上の専任教員および助教・助手の全員（47 名分：100%）から、それに基づく授業改善報告書が提出されることとなった。また、8 名の非常勤講師からも授業改善報告書が提出された。全ての授業改善報告書は、氏名のみが伏される形で、学部事務室内において教員を対象に公開された。この授業改善報告書については、平成 22 年度の導入から平成 29 年度後期分まで計 14 回提出されており、毎回前年度あるいは前回の反省を踏まえた改善報告が克明に記されるなど、全教員の積極的かつ継続的な改善努力が示されてきた。

各教員の授業改善報告書は、学部 FD・SD 委員会によって「専門講義科目」「専門実技科目」「生涯スポーツ論」「生涯スポーツ演習」に分類した形で「授業改善報告書まとめ」として集約・総括されてきた。また、それとは別に、平成 27 年度後期以降は、同委員会によって授業改善報告書の上記 3 つの質問項目に関する各教員の具体的な記述内容（コメント）を記した「『授業改善報告書』コメント集」が作成され、各教員の授業改善の試みの網羅的な紹介とその情報共有が図られた。なお、平成 30 年 9 月 19 日開催の教授会では、平成 29 年度前期の授業改善報告書まとめ、および「授業改善報告書」コメント集が報告されている。また、この両者は PDF 文書として、平成 30 年 9 月 25 日に、授業における教育の質向上に資することを目的に、助教・助手を含めたスポーツ科学部全教員に学部事務職員を通してメール配信された。なお、平成 29 年度後期の授業改善報告書まとめ、および「授業改善報告書」コメント集については、2019 年度 4 月開催の教授会で報告予定である。

例年と同様に、平成 29 年度前期の授業改善報告書まとめでも総括しているとおおり、「専門講義科目」「専門実技科目」「生涯スポーツ論」「生涯スポーツ演習」の全領域において、多くの教員がシラバスに示した到達目標を概ね達成できたとしている。また、提出された授業改善報告書によれば、多くの講義科目で、ミニッツペーパーの活用、配布資料や映像をはじめとする教材の利用などを通して、学生に理解しやすい授業展開に心がけられている。そして、そうした授業になるような雰囲気づくりに努力する姿勢にも再三言及されている。さらに、グループワークの導入といった学生の能動的な学びを目指す試みも目につき、その学習・教育効果も示唆されている。一方で、これも例年どおりではあるが、授業内容の一層の精選、話し方やスライドの映し方の改善、学生を受講態度の問題、特に授業中のスマートフォンの使用や私語等への適切な対応などが課題として認識されている。実技授業に関する授業改善報告書の多くでも、理解しやすい動作説明、映像の活用、受講者間での熟練者による非熟練者への指導・助言、その両者のペアリングによる学習など、授業づくりのための多様な工夫が確認される一方で、技能や意欲に関する個人差への対応の必要性とその難しさに頻繁に言及されていた。また、平成 29 年度より利用され始めた総合体育館については、それによる利便性の向上とともに、温度設定の要望が多く見られ、同年度から使用されている教科書『大学生の健康生活とスポーツ』についても、一層の有効活用が必要という意見が見られた。

次に「②」の「新」授業アンケート「FURIKA（Fukuoka University self-Reflection Index of Knowledge, Abilities, and Attitudes の略）」の実施について述べていきたい。平成 30 年度より全学統一の実施体制の下で、全科目を対象とする Web による新授業アンケート「FURIKA」が導入された。FURIKA は、学生が主に教員のパフォーマンスを測定していた旧授業アンケートとは異なり、学生のパフォーマンスに焦点を当てた設問項目から構成される、学生の自己評価に基づく授業アンケートである。平成 30 年度におけるその実施期間は、前期が 7 月 10 から 24 日まで、後期が 12 月 18 日から 1 月 16 日までであった。

「2018 年度前期授業アンケート速報値集（学内公開版）」によれば、スポーツ科学部専門科目についての回答率（回答学生数／履修学生数）は 82.3%（大学全体の回答率は 76.3%）、実施率（回答率 30%以上の回答科目／対象科目）は 97.3%（大学全体の実施率は 96.1%）といずれも高い数値を示した。また、学部専門教育科目のシラバスに示されている到達目標についてのスポー

ツ科学部生の「到達度」は平均 3.97（共通教育科目については 3.79）、授業への主体的・積極的な取り組みを示す「積極性」は平均 4.04、授業内容の理解に関わる「理解度」は平均 4.02 であり、いずれも医学部生に次ぐ 2 番目の高さであった（ただし、共通教育科目に関わる「到達度」は、医学部、人文学部に次ぐ 3 番目）。以上の全体的な結果からは、スポーツ科学部の学生が授業での「到達度」「積極性」「理解度」に関わる自らのパフォーマンスを高く評価していることがわかる。

なお、後期の実施状況については、FURIKA 全体の詳細なデータが次年度に発表されるため、現時点では回答率のみが明らかになっている（スポーツ科学部 60.2%、大学全体 58.1%）。前期と比較して、回答率がかなり低下しているが、その理由として「回答期間に年末年始が挟まった」「多くの 4 年次生が履修登録はしたものの、実際には出席しなかった可能性がある」「1 回目（前期）に回答した結果、特に回答しなくても支障がないということがわかったのではないか」といった点が指摘されている。

この FURIKA の特徴の 1 つに、担当教員、学位（教育）プログラム責任者の教員、学生にそれぞれきめ細やかなフィードバック情報を Web 上で提供していることが挙げられる。例えば、主に学生の回答結果の分布を見る「アンケート内容」、主に当該科目を学科の全体平均と比較する「集計結果」、「所属学部と到達度」がそれぞれ棒グラフで表示されていることで、科目の概況の把握が可能になる。また、独自に開発された「T 図（到達図）」を用いた「成績と到達度」「出席と到達度」「GPA と到達度」のグラフからは、主に科目の到達目標への学生の到達状況を類推することができる。さらには、FURIKA には、学生が当該科目において学んだことを自由回答する設問があり、その内容については担当教員だけでなく、自由回答を行った学生も教員が選択した回答例を閲覧することができる。ただし、このようなきめ細やかなフィードバック情報が提供されているにもかかわらず、教員や学生がフィードバック情報を十分に閲覧・活用しているとは言い難いのが現状であり、それはスポーツ科学部についてもまた同様である。今後、教員および学生によるフィードバック情報の閲覧・活用を推進していくような施策の展開が必要であろう。とりわけ、教員各自がフィードバック情報を正しく読み取り、自身の授業改善に役立てるとともに、例えば旧授業アンケートの際に行っていた各教員による授業改善報告書の提出、授業改善報告書まとめとそのコメント集の作成といった、授業改善に向けた組織的な取り組みについても、スポーツ科学部全体で推し進めていかねばならない。2019 年度の課題としたい。

最後に「③」の『福岡大学スポーツ科学部授業アンケート報告書 - 平成 26 年度から平成 29 年度までの歩み - 』について述べていきたい。この報告書は、『福岡大学スポーツ科学部授業アンケート報告書 - 平成 22 年度からの歩み - 』の刊行（平成 26 年 3 月）後に得られた、平成 25 年度後期以降の授業アンケートの結果および各教員による授業改善報告書についてまとめたものである。そこには特に、前報告書の掲載内容を踏襲して、各学期の授業アンケートについて教授会で報告された、前述の授業改善報告書まとめ（平成 27 年度後期以降は「授業改善報告書」コメント集も追加）、および前期は 6 つの科目領域に、後期は 7 つの科目領域に分類された授業アンケートの結果が経年的に記載されている。巻末に掲載されている平成 25 年度後期以降の授業アンケートの結果からは、共通教育科目としての保健体育科目「生涯スポーツ演習」および「生涯スポーツ論」がその受講生によって、またスポーツ科学部専門教育科目がスポーツ科学部生によっ


て高く評価されてきたことがわかる。また、授業改善報告書まとめ、および「授業改善報告書」コメント集からは、科目担当の教員が、そうした良好な授業アンケートの結果に慢心することなく、真摯に授業改善に取り組んできた努力の様子が窺えるとともに、授業の方法論、評価方法、多様な学生への対応、施設・用具の使用方法やそれへの要望などの観点で、今後も継続して取り組むべき課題もまた確認されうる。学生自身のパフォーマンスに焦点を当てた新授業アンケート「FURIKA」を活用しながら、授業の質向上に向けて各教員がそうした課題の克服に努力するなどして、引き続き積極的な授業改善活動を展開する必要があるだろう。

平成30年度スポーツ科学部主催FDワークショップ

コンピテンシーテストの 結果を用いたアクティブ・ ラーニング型教育の実践

●ねらい:

昨年度は、PROGコンピテンシーテストの結果をどのように教育実践につなげていくのかについて、他大学での授業事例を交えて学んだ。今回は、グループ学習形式のアクティブ・ラーニング(AL)メソッドの1つである「タクナル」を体験し、コンピテンシーテストの結果を活用したAL型教育の実践とそれによる学生能力開発の可能性を探りたい。

 <p>講師: 平田史昭氏 株式会社リアセック 「タクナル」開発G</p> <p>タクナルは、大学生が大学生活や社会人生活に必要なコンピテンシーをはじめとするチカラとキモチを高めるための、実践プログラムです。 与えられた知識を学ぶのではなく、様々な問題を自ら考え、他者と意見を交わし合いながらチームでひとつずつ問題を解決していきます。 チームで協力し合いながら、楽しく取り組むだけで、知らず知らずのうちにコミュニケーション力や問題解決力が身についていきます。タクナルの「楽しい学び体験」を通じて、自立した自らが考えて行動に移し、様々な課題を解決していくことは、まさにコンピテンシー育成には絶好の機会と言えます。</p>	<p>プログラム(90分):</p> <ol style="list-style-type: none">1) イントロダクション2) 2018年度のPROG結果概要 ～傾向と課題設定～3) 「タクナル」メソッドの体験4) 質疑応答5) まとめ
---	---

【日時】 2019年1月18日(金) 16:30～18:00

【場所】 スポーツ科学部 第二記念会堂 1222教室

【対象】 福岡大学教職員

【問い合わせ先】 スポーツ科学部事務室(内線:2266、2267)

※参加のお申し込みの際は、お名前とご所属をお伝えください

資料 2

学生の皆さんへ

2018年4月1日 日曜日

スポーツ科学部

平成29年度後期スポーツ科学部授業アンケート集計結果について(お知らせ)

スポーツ科学部では平成29年度後期に授業アンケートを実施しました。本学部の教員が行う全授業科目を対象に各質問項目の評価を集計し、授業形態別に平均値を出しました。結果は以下のとおりです。

なお、評価は5段階で行い、「共通質問項目」の平均を表記しています。

結果 1.生涯スポーツ演習 (スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 151 アンケート実施科目数: 130】

履修登録数: 4,056名 アンケート実施対象者数: 3,472名 回答者数: 2,889名
回答率: 83.2%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.3
A-2 授業は理解しやすかった	4.4
A-3 教師の熱意を感じた	4.4
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.5
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.1
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.5
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.5
A-8 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.4
A-9 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.4
A-10 この授業に満足している	4.5

結果 5.専門講義科目 (選択)

【対象科目数: 29 アンケート実施科目数: 25】

履修登録数: 3,075名 アンケート実施対象者数: 2,858名 回答者数: 1,761名
回答率: 61.6%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.0
A-2 授業は理解しやすかった	4.0
A-3 教師の熱意を感じた	4.1
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.1
A-5 板書や視覚覚醒器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.0
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.0
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.1
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.1
A-10 この授業に満足している	4.0
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.1

結果 2.生涯スポーツ論 (スポーツ科学部以外)

【対象科目数: 12 アンケート実施科目数: 12】

履修登録数: 1,501名 アンケート実施対象者数: 1,501名 回答者数: 930名
回答率: 62.0%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.8
A-2 授業は理解しやすかった	3.9
A-3 教師の熱意を感じた	3.8
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.0
A-5 板書や視覚覚醒器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.0
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.9
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.1
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	3.9
A-10 この授業に満足している	3.9
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	3.9

結果 6.実験、演習科目 (心理学、生理学、運動学、社会調査、情報処理、健康スポーツ)

【対象科目数: 25 アンケート実施科目数: 22】

履修登録数: 869名 アンケート実施対象者数: 846名 回答者数: 664名
回答率: 78.5%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.1
A-2 授業は理解しやすかった	4.1
A-3 教師の熱意を感じた	4.2
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.2
A-5 板書や視覚覚醒器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.1
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.1
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.2
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.2
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.2
A-10 この授業に満足している	4.2
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.2

結果 3.専門実技科目 (レクリエーション演習、生涯スポーツ演習Ⅰ～Ⅳを含む)

【対象科目数: 43 アンケート実施科目数: 38】

履修登録数: 1,996名 アンケート実施対象者数: 1,836名 回答者数: 1,445名
回答率: 78.7%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.2
A-2 授業は理解しやすかった	4.3
A-3 教師の熱意を感じた	4.4
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.3
A-5 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.2
A-6 教師の学生に対する態度は適切だった	4.3
A-7 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.4
A-8 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.3
A-9 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.3
A-10 この授業に満足している	4.3

結果 7.スポーツ科学演習・卒業研究論文

【対象科目数: 58 アンケート実施科目数: 45】

履修登録数: 623名 アンケート実施対象者数: 482名 回答者数: 406名
回答率: 84.2%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	4.6
A-2 授業は理解しやすかった	4.5
A-3 教師の熱意を感じた	4.7
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	4.6
A-5 板書や視覚覚醒器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	4.5
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	4.5
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	4.6
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.6
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	4.6
A-10 この授業に満足している	4.7
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	4.6

結果 4.専門講義科目 (必修)

【対象科目数: 9 アンケート実施科目数: 8】

履修登録数: 1,980名 アンケート実施対象者数: 1,817名 回答者数: 1,304名
回答率: 71.8%

質問項目	平均
A-1 授業は興味や関心を引くものだった	3.8
A-2 授業は理解しやすかった	3.8
A-3 教師の熱意を感じた	3.9
A-4 教師の話し方や声は聞き取りやすかった	3.9
A-5 板書や視覚覚醒器(プロジェクターなど)の使用は適切だった	3.9
A-6 教材(教科書・資料・実習教材など)は適切だった	3.9
A-7 教師の学生に対する態度は適切だった	3.9
A-8 授業の開始時間、終了時間が守られていた	4.0
A-9 学習する雰囲気を作る行動に対して、適切な対応が行われていた	3.9
A-10 この授業に満足している	3.8
A-11 授業の目標に到達するに適切な内容であった	3.9

< 参 考 >

評価 (5段階)

全く当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	やや当てはまる	とても当てはまる
1	2	3	4	5

以上

8 地域連携・社会貢献・高大連携

野口 安忠・乾 真寛・小牟礼 育夫

■ 地域連携・社会貢献

1. 各教室の実施状況

平成 29 年度、エクステンションセンター事業である福岡大学市民カレッジの参画で開講した講座数は 11 講座、受講者数が 496 人であったのに対し、平成 30 年度の講座数は 9 講座、受講者数は 532 人であった。平成 30 年度は「ホノルルマラソンを完走しよう」の 3 講座が閉講したが、これまで前期のみ開講していた「キッズ・サッカークラブ」が後期にも 1 講座を追加したことで、平成 29 年度より全体の受講者数は 36 人の増加となった。福岡大学市民カレッジ以外の活動では、平成 27 年からスポーツ庁「2019 年ラグビーワールドカップ普及啓発事業」の参画で開講している JRFU 放課後ラグビープログラムに、今年度も近隣の中学生 30 人が受講した。また、小学生 50 人を対象とした元サッカー日本代表選手の指導による親子サッカー教室（キリンビバレッジ共催）計 3 回も開講した。

《キッズ・スポーツ教室》受講生 7 教室 計 429 人

◇前期開催：キッズ体操教室（48 人）、キッズ・サッカークラブ（115 人）、キッズ・バレーボール教室（30 人）、キッズ・バスケットボール教室（14 人）

◇後期開催：キッズ体操教室（43 人）、キッズ陸上教室（78 人）

《一般・スポーツ教室》受講生 5 教室 計 103 人

◇前期開催：女性のための元気体操教室（53 人）

◇後期開催：女性のための元気体操教室（50 人）

《その他》

◇JRFU 放課後ラグビープログラム（30 人）

◇小学生対象サッカー教室（50 人）

2. 授業支援および事業企画

平成 29 年度に引き続き、福岡市との連携協定に基づく地域及び社会貢献活動を行った。教育支援プロジェクトでは、小学生を対象にサッカー及び水泳指導、新体力テストを通じて 8 件の授業支援を実施した。

新体力テストでは、「私立大学研究ブランディング事業」における「学童期・思春期の学校適応支援・活力ある人間形成の研究チーム」と連動しており、子供の体力の維持向上を目的に、学生の授業補助を通して、生まれ月と体力の関連、運動部およびクラブ所属状況と体力の関係について調査を行い、報告している。また、同研究チームでは、平成 30 年 4 月 1 日付けで、福岡市すべての小中学校に、福岡市教育委員会と共同で作成した体育授業に用いることのできるコーディネーショントレーニングの書籍及び DVD を配布している。来年度は、配布した資料を授業の中にもどのように活かしていくか、検討する予定である。さらに、今年度は福岡市教育委員会から小学生を対象に授業支援の依頼が 2 件あり、新体力テストを実施した。

事業企画・協力では、開始して4年目を迎えた福岡市東区アイランドシティにおける健康づくりを目的とした運動指導と体力測定会に34人の高齢者が参加し、本事業の効果を高めるために栄養摂取状況、運動実践状況などの調査や結果のフィードバックも実施した。

この他、福岡市主催の第8回平成外環通りウォーキング大会では、一般市民約250人が参加し、本学部も市民の健康促進および地域コミュニティの活性化のために運営協力を行った。

◇授業支援（福岡市との連携協定：私立大学研究ブランディング事業）

新体力テスト：那珂小学校、春住小学校、東住吉小学校、塩原小学校、飯原小学校

体育（水泳）：那珂小学校、横手小学校

体育（サッカー）：那珂小学校、横手小学校

◇授業支援（福岡市教育委員会）

新体力テスト：名島小学校、春吉小学校

◇事業企画・協力

福岡市東区アイランドシティにおける運動指導と体力測定会（34人）

福岡市主催第8回平成外環通りウォーキング大会（250人）

3. その他

本学部で発足した「スポーツ振興プロジェクトチーム」を中心として「第2回ふれあいスポーツフェスタ2018 in 福岡大学」を開催した。本学部教員やサッカー部員(100名)、一般学生(100名)が本学サッカー場において、精神障害者を対象とした「スカンビオカップ」と手足の切断傷害を持つ「アンプティー体験会」や聴覚障害の方々の「デフサッカー体験会」など、3つの障がい者サッカー大会を開催した。開催にあたり、本学では全学部からボランティアを募り、体育部会だけでなく、文化系サークルからも学生が参加し、大会運営・会場準備・障がい者サポートで貴重な経験を積んだ。イベントの様子は、多くの地元メディアから取材を受け、夕方のニュース番組で放映された。大学が地域や地元支援企業と共に進めるスポーツ振興事業として大きな成果を挙げた。

2018年は、ミズノ株式会社と福岡大学の連携協定が締結され、産学官の連携プロジェクトとして、福岡市立総合体育館のオープニングイベントにも参加した。バレーボール・卓球・バトミントンの3種目でスポーツ教室を開催し、ミズノ社専属の著名な講師陣と共に、福岡大学の学生が指導コーチサポート役を務め、イベントの運営・成功に貢献した。

その他、福岡市の福岡少年院でのサッカー指導や、スペインサッカー指導者によるサッカーコーチングクリニック（講義・実技）を開催した。また、「福岡大学招待中学生女子バレーボール大会」を開催し、九州各県、山口地区の中学校64校が参加した。

「UNIVAS」一般社団法人大学スポーツ協会へ加盟した本学は、より積極的に地域とのスポーツ交流を促進していくことになる。福岡大学の施設・指導者・学生は、高いポテンシャルを有しており、今後も、より社会貢献活動を盛んに取り組む。

■ 高大連携

高大連携事業は、主に福岡大学附属大濠高等学校、福岡大学附属若葉高等学校、スポーツコミュニケーションコースがある福岡県立早良高等学校と行われている。

【附属大濠高等学校】

9月 2年生を対象とし、大濠高等学校にて講義を2コマ行なった。

【附属若葉高等学校】

6月 体育祭を第二記念堂で行なった。

7月 1年生を対象とし、スポーツ科学部教員が若葉高等学校で講義を行なった。

10月 2年生を対象とし、スポーツ科学部教員が本学にて講義を行なった。

12月 スポーツ科学部学部祭のイベントのひとつ「先輩と語る」に生徒が参加した。

3月 進学体育コース2年生を対象としたゴルフ実習の支援を行なった。

【福岡県立早良高等学校】

担当教員の異動などにより具体的な活動は行われなかったが、次年度以降、高等学校側の要望を受け入れ、以下のような連携を進めていきたい。

1) 出張講義

コミュニケーション能力向上のためのレクリエーション授業の実施。

2) 教育実習の受け入れ

本学部生の教育実習の受け入れ。

3) 運動部活動における連携

本学の教員・学生指導者の派遣と、本学部活動との合同練習、練習試合の実施。

9 国際交流

森口 哲史

■ 国際センター関連事業

1. 学部生に対する情報提供

- ・新入生全員に対する学部懇談会(2018年4月)で関連事業の案内を行なった。
その際、「福大生のための学習ナビ2018」を活用した。
(内容)国際センターの活用方法、グローバル・アクティブ・プログラム(GAP)、
交換留学と海外研修、留学生交流(国際交流チーム;FIT)について

2. 国際センタープログラムを活用した交換留学・海外研修

- ・交換留学;スポーツ科学部 0名
- ・海外研修;スポーツ科学科 1名、健康運動科学科 1名、計 2名
(ニューカッスル大学・イギリス)

3. GAP連携のインターメディエイト・イングリッシュ GE クラスを履修した学生の 短期海外研修

- ・スポーツ科学科;4名(マルタ2名、アメリカ1名、イギリス1名)

4. 福岡大学国際交流チーム(FIT)登録者

2018年度 スポーツ科学部;0名

■ 大学間学術協定 MOU

1. スポーツ科学部から申請した大学間学術協定事業について、Universiti Teknologi

MARA(UiTM;マレーシア・クアラルンプール)との大学間学術協定が平成31年2月4日付け(学長調印)で締結された。また、UiTM 理事(DATO MOHD ZAINI HASSAN氏)およびUiTM スポーツ科学部副学部長(DATIN Dr. SARIMAH ISMAIL氏)が本学スポーツ科学部を表敬訪問され、田中守学部長および檜垣靖樹研究科長と共に学術連携について意見交換された。

この大学間学術協定締結を受けて、両大学学部間・大学院研究科間の学術連携・交流事業を積極的に推進することが確認された。

(参考)福岡大学国際センターホームページ掲載(海外協定情報 NO.76)

■ 留学生関係

1. 外国人留学生数

大学院博士後期課程;1名(マレーシア)

2. 学部留学生入学試験

スポーツ科学部；志願者 0 名、合格者 0 名、入学者 0 名

■ 体育・スポーツのエキスパート育成プログラム

1. アスリート・コーチ育成プログラムによる海外研修

スポーツ科学科；1 名(陸上競技の研修、台湾・高雄市)

(参考・2018 年度 スポーツ科学部の海外研修に繋がる関連科目受講者数)

ピークパフォーマンス演習 I スポーツ科学科 182 名、健康運動科学科 10 名

ピークパフォーマンス演習 II スポーツ科学科 7 名

トップアスリートコーチ論 スポーツ科学科 25 名

■ 国際協力機構 JICA との連携事業

1. スポーツ科学部生がスポーツ分野の学生ボランティアとしてボリビアに派遣され、計 11 名がサポート活動を行った。2019 年 2 月 6 日～2019 年 3 月 8 日

(参加学生；野球部 6 名、サッカー部 5 名)

<スポーツ健康科学研究科と釜山国立大学スポーツ科学研究科との学術交流>

1. 7th Pusan National University (Korea) & Fukuoka University Annual Conference 2018 が開催された(2018 年 11 月 24 日；福岡大学)。

(研究科教育活動状況に再掲)

10 教職課程

柿山 哲治

■ 教職課程登録者数 (2018 年度)

学部	学科	18 台	17 台	16 台	15 台	14 台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科	163	150	110	92	0	515
	健康運動科	51	54	39	27	0	171
合計		214	204	149	119	0	686

■ 社会教育主事課程科目登録者数 (2018 年度)

学部	学科	18 台	17 台	16 台	15 台	14 台以前	合計
スポーツ科	スポーツ科			1	0	0	1
	健康運動科			0	0	0	0
合計				1	0	0	1

■ 教員免許状取得状況 (2018 年度)

学部	学科	卒業生	免許状取得者数	免許状取得率
スポーツ科	スポーツ科	223	80	35.9%
	健康運動科	72	22	30.6%
合計		295	102	34.6%

■ 教員免許状 (一種) 一括申請者数 (2018 年度)

学部	学科	申請者数	中一種	高一種	申請件数
			保健体育	保健体育	
スポーツ科	スポーツ科	80	62	80	142
	健康運動科	22	15	21	37
科目等履修生 (含大学院生)		2	1	2	3
合計			78	104	182

■ 教員免許状更新講座

講座名：『保健体育教員なら知っておきたいレクリエーションと柔道の指導法』

実施日：2018年8月9日（木） 受講者数：9名

担当者：築山泰典教授、坂本道人准教授

講座名：『保健体育教員なら知っておきたいバレーボールとダンスの指導法』

実施日：2018年8月21日（火） 受講者数：14名

担当者：米沢利広教授、柿本真弓教授

講座名：『保健体育教員なら知っておきたい子供のメンタルヘルスとスポーツ傷害の予防法』

実施日：2018年8月22日（水） 受講者数：30名

担当者：山口幸生教授、重森 裕准教授、秀 泰二郎助教

■ 教員採用試験合格者数

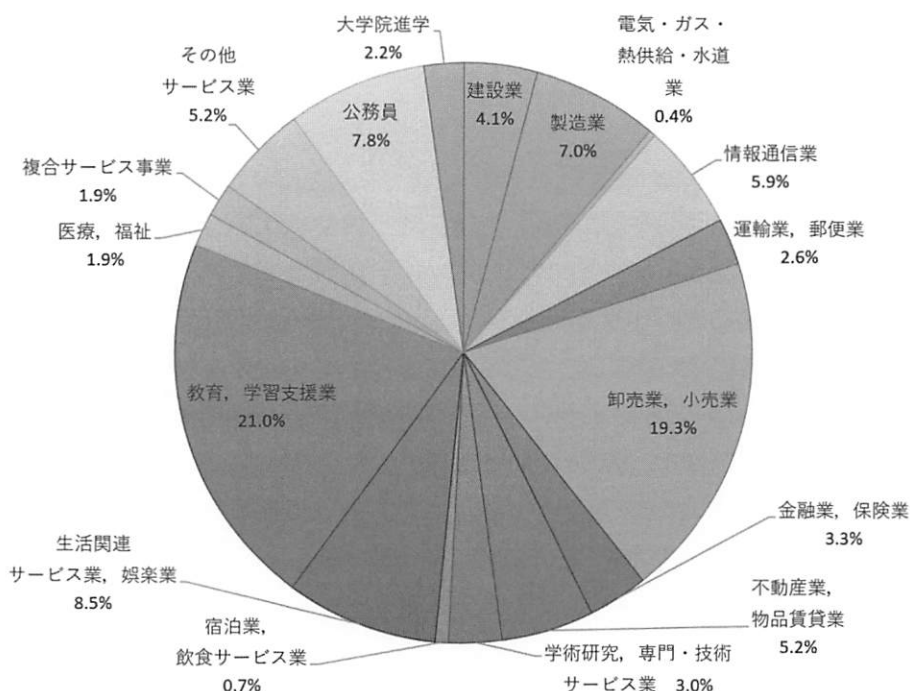
3名（広島県中学校1名、長崎県中学校1名、広島県小学校1名）

11 就職・進路

(1) スポーツ科学部

柿本 真弓

平成 30 年度の全国大卒求人倍率は、1.88 倍（リクルートワークス研究所調べ）となっており、企業の採用意欲が高い状況が続いている。本学に寄せられた求人は、17,794 件、来学企業件数は、1,368 社であった。また、就職率は 97.1% となり、0.2 ポイント上昇した。スポーツ科学部においては、全体で 99.2%、男子 100%、女子 97.7% であった。その内訳は円グラフに示した。



主な就職先は、以下のとおりであった。

(株) 九電工、昭和建設 (株)、セキスイハイム九州 (株)、三菱電機ビルテクノサービス (株)、新日鐵住金 (株)、タカラスタンダード (株)、(株) ツムラ、久光製薬 (株)、丸東産業 (株)、リンナイ (株)、大阪瓦斯 (株)、エン・ジャパン (株)、西日本電信電話 (株)、日鉄住金テクノロジー (株)、広島ホームテレビ、三井情報 (株)、九州旅客鉄道 (株)、アイリスオーヤマ (株)、(株) アルペン、キャノンシステムアンドサポート (株)、九州日野自動車 (株)、(株) 九州マツダ、九州三菱自動車販売 (株)、コカ・コーラボトラーズジャパン (株)、(株) 翔薬、正晃 (株)、南国殖産 (株)、あいおいニッセイ同和損害保険 (株)、(株) 西日本シティ銀行、日本生命保険相互会社、(株) 福岡銀行、(株) 三井住友銀行、公益財団法人熊本 YMCA、(株) ゼンショーホールディングス、吉本興業 (株)、アイ・ケイ・ケイ (株)、西鉄旅行 (株)、(株) Plan・Do・See、国立大学法人広島大学、(学) 東福岡学園、幼児活動研究会 (株)、糸島農業協同組合、公益財団法人福岡県体育協会、(株) ドームユナイテッド、北九州市消防局、刑務官、広島県教員 (小・中学校)、長崎県教員 (中学校) など

(2) スポーツ健康科学研究科

川中 健太郎

前期課程修了者の就職先は、株式会社ドーム(1名)、国立研究開発法人医療基盤・健康・栄養研究所(1名)、株式会社エスエスケイ(1名)、福岡大学スポーツ科学部(助教4名)であった。博士後期課程修了者(1名)の就職先は、福岡大学病院脳神経外科ポスドクであった。

12 広報推進

小牟礼 育夫・今村 律子・森下 奈央

■ 学部ホームページリニューアル

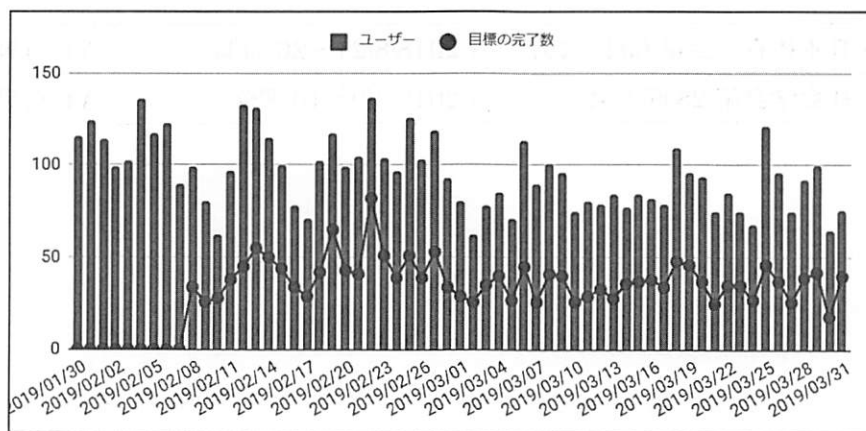
2018年度、広報推進の大きな取り組みは、学部ホームページのリニューアルであった。本学サーバー環境利用可否、助手室からの更新のしやすさ、実績HPのデザイン傾向を鑑み、株式会社九州インターメディア研究所と契約を行った。担当教員、技術職員、助手室担当教員との打ち合わせを行い、11月14日一部公開、12月7日に全公開となった。

情報更新作業は、年次更新(「トップ選手を輩出」卒業生と現役学生の確認)、随時更新(TOPICS)が中心となっている。

2018年度 カテゴリー別更新件数(単位:件) *述べ件数

カテゴリー	入試情報	部活動	教育・研究	学生・教員の活躍	お知らせ	試合結果	合計
更新件数	0	7	1	5	14	37	64

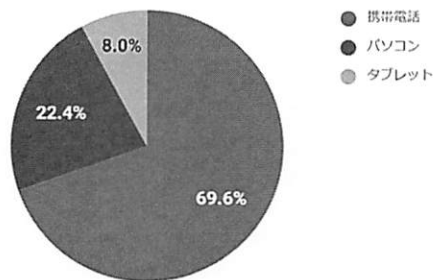
2019年1月30日より、アクセス解析ツール(Google アナリティクス)を設定した。入試情報サイトへのアクセスを目標項目とした場合のアクセス状況、デバイス別アクセスと都道府県別アクセスランキングを下記に示す(2019/1/30~3/31調べ)。



【目標】入試情報サイト到達(スポ科HP画面下の入試情報サイトボタンをクリック)

日別アクセスユーザー数と目標完了数

都道府県別アクセスランキング(目標到達順)

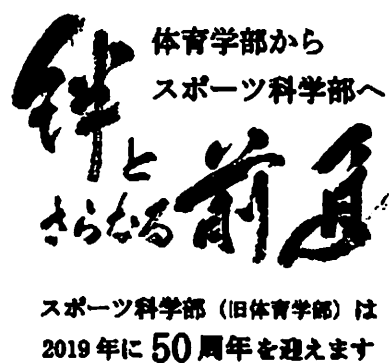


デバイス別アクセスの割合

都道府県名	ユーザー	目標1の完了数	目標1のコンバージョン率
1. 福岡県	1812	848	28.72%
2. 大阪府	871	278	25.46%
3. 東京都	650	192	24.15%
4. 広島県	111	79	54.48%
5. 熊本県	117	63	47.73%
6. 山口県	90	63	58.33%
7. 鹿児島県	80	42	45.65%
8. 長崎県	89	42	41.18%
9. 佐賀県	94	41	39.42%
10. 神奈川県	151	38	22.89%

■ 学部創設 50 周年記念事業

2019 年度に、学部創設 50 周年を迎えるにあたり、期間限定サイトを作成した。記念事業テーマとして「体育学部からスポーツ科学部へ 絆とさらなる前進」が決定し、2017 年度当学部卒業生書道部であった石橋朋弥氏に、筆文字製作を依頼した。来年度発行の学部ガイド（2020 版）にも、記念サイトの QR コードとテーマロゴが掲載される。



学部ガイド（2020 版）掲載ロゴと 50 周年記念ホームページ URL の QR コード

■ 学部広告掲載一覧

一般社団法人日本体育学会第 69 回大会	2018/8/24～26 開催	A4 白黒 1 ページ
日本スポーツ社会学会第 28 回大会	2019/3/9～10 開催	A4 白黒 1 ページ

13 外部獲得資金実績

布目 寛幸

科学研究費 (H30 年度)

研究種目	代表者名	研究課題	金額
基盤研究(B)	今村 律子	アスリートの『観るチカラ』の不思議に迫るー注視点揺動による視覚情報方略の解明ー	1,200,000
基盤研究(B)	川中 健太郎	骨格筋糖取り込みを高める栄養・運動処方に関する基礎研究ービタミンDに着目してー	3,600,000
基盤研究(B)	檜垣 靖樹	エピジェネティック修飾を介する骨格筋糖代謝の分子適応機構の解明	2,600,000
基盤研究(C)	上原 吉就	運動による HDL 代謝・機能の向上作用とミトコンドリア機能へおよび効果の検討	1,000,000
基盤研究(C)	柿山 哲治	マリアナ・ヤング女史が明治期に導入した Physical Culture の解明	800,000
基盤研究(C)	下園 博信	ボールゲームプレイヤーの知覚・認知能カトレーニングの開発および検討	900,000
基盤研究(C)	布目 寛幸	足底装具(インソール)によるスポーツパフォーマンスへの効果の解明	1,400,000
基盤研究(C)	道下 竜馬	労働者の労働生産性向上に対する職場単位で行うアクティブレストの効果検証	1,400,000
挑戦的研究(萌芽)	川中 健太郎	骨格筋の成長を促すアミノ酸や低分子ペプチドの探索と同定	2,500,000
挑戦的研究(萌芽)	檜垣 靖樹	運動トレーニング及び肥満への適応は筋幹細胞にメモリーされるか?	2,200,000
若手研究(B)	伊賀 崇人	サッカーのボールインパクトにおける足部への力学的負荷を推定する新たなモデルの開発	500,000
若手研究(B)	泉原 嘉郎	小学校の体育授業で使える実践的コーディネーショントレーニングの開発と効果検証	900,000
若手研究(B)	塩瀬 圭佑	習慣的な糖質摂取量の違いが運動後の筋グリコーゲン回復の個人差に及ぼす影響	900,000
若手研究(B)	田村 雄志	棒高跳の助走におけるストライド調整メカニズムの解明	1,100,000
若手研究(B)	樋口 沙希重	短距離疾走速度と接地パラメータの関係とトレーナビリティ	400,000
若手研究	羅 成圭	老化とともに骨格筋や脳が委縮する分子機構ならびに運動による防止効果	1,300,000

受託研究 (H30年度)

依頼者	研究代表者	研究課題	金額
中村学園大学	檜垣 靖樹	メタボリック症候群の個々人の心音に基づく運動アドバイスシートの開発	18,000
春日市立天神山小学校	山口 幸生	児童の体力と心理社会的要因の関連性	201,000
慶應義塾大学	檜垣 靖樹	高齢者の虚弱化の予防・先送りに資する総エネルギー消費量の評価法に関する研究	3,120,000

研究助成寄付金 (H30年度)

寄付者	研究代表者	研究課題	金額
ノバルティスファーマ(株)	上原 吉就	研究助成のため	500,000
コカ・コーラ ボトラーズ ジャパン(株)	布目 寛幸	研究助成のため	2,500,000
第一三共(株)	上原 吉就	高血圧症治療に関する研究助成	1,500,000
(社)10分ランチフィット ネス協会	道下 竜馬	10分ランチフィットネスプログラムの啓蒙活動、調査研究に対する助成	300,000

共同研究 (H30年度)

寄付者	研究代表者	研究課題	金額
株)ドリーム・ジーピー	布目 寛幸	インソールの形状の違いがヒトの最大発揮筋力に及ぼす効果	0
株)ハルメク	布目 寛幸	中高年女性用カスタムシューズの効果に関する研究	1,000,000
サントリー食品インター ナショナル(株)	檜垣 靖樹	イノシン酸の経口投与がマウス骨格筋グリコーゲン蓄積に及ぼす影響	2,220,000
パナソニック(株)エコソリューション ズ社	檜垣 靖樹	住宅高齢者の活動量履歴解析による認知症早期発見に関する研究	0
コカ・コーラ ボトラーズ ジャパン(株)	布目 寛幸	肉体労働サポートツールによる身体労働負荷軽減の試み	0
京都大学	檜垣 靖樹	IPS 細胞由来の骨格筋細胞における核とミトコンドリアの共遊走機構の 解明	0
ミズノ(株)	布目 寛幸	肉体労働サポートツールの効果に関する研究	0
京都大学	上原 吉就	iPS 細胞由来の心筋・骨格筋細胞におけるアポリポ蛋白発現調節機構 の解明とミトコンドリア機能への影響	0

14 関連資料一覧

※ 福岡大学 大学案内

※ 福岡大学スポーツ科学部 学部案内

※ 福岡大学入試ガイド

※ 福岡大学要覧

※ 福岡大学スポーツ科学研究

※ 教育開発支援機構年報

※ 福岡大学スポーツ科学部授業アンケート報告書 - 平成 26 年度から平成 29 年度までの歩み -

※ 福岡大学研究推進部年報 (2018)

※ 体育・スポーツのエキスパート育成プログラム事業報告書 (平成 30 年度)

※ 福岡大学スポーツ科学部卒業論文抄録集 (平成 30 年度)

※ 教育実習報告書

※ 教職事前実習報告書

※ キャンプ実習、スケート実習、アクア実習、スキー実習報告 (平成 30 年度)

※ 大学生のスポーツと健康生活 (大修館書店)

福岡大学
スポーツ科学部 大学院スポーツ健康科学研究科 年報
平成 30 年度 (2018) 第 4 号

発行日 平成 31 年 4 月 発行
編集者 学部年報編集委員会
田口晴康 森口哲史 今村律子
発行者 福岡大学スポーツ科学部
〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19-1
TEL : 092-871-6631(代) FAX : 092-865-6029
印刷所 有限会社新幸印刷
〒830-0045 福岡県久留米市小頭町 10-1-2F
TEL : 0942-38-0898

